実践編目次

研究ブロックの研究概要・架け橋期のカリキュラム

- 御所南小ブロック……32
- 下京雅小ブロック……40
- 竹田小ブロック……48

	事例名			ページ
幼児期の学びの芽生え	体を動かして遊ぶ楽しさを味わう姿を通して		幼保	56
	気の合う友達と一緒に身近な生き物との出会いを通して		幼保	57
	思いを込めてクジャクをえがく		幼保	58
	氷に興味や関心をもって関わり、考えたり試したりする姿		幼保	59
	多様性を受け入れ仲間とルールを考えて遊ぶ姿から		幼保	60
	生活発表会（劇遊び）の取組を通して		幼保	61
スタートカリキュラム	入学前に行う半日入学の工夫		小	62
	安心感をもち友達とふれあう入学式		小	63
	安心感と自己発揮のスタートカリキュラム		小	64
	幼保の保育者による読み聞かせ		幼保小	65
	生活科・国語科「めいしこうかんをしよう」		小	66
	算数科「わくわくがっこう」		小	67
	音楽科「うたっておどってなかよくなろう」「はくをかんじとろう」国語科「どうぞよろしく」		小	68
	生活科「いちねんせいがはじまるよ」道徳科「たのしいがっこう」		小	69
つながりのある保育・授業	算数科	数量や図形などへの関心・感覚	幼保	70
		ものとひとのかず	小	71
	体育科	帽子取り	幼保	72
		マットあそび	小	73
	生活科	ハーモニーピザパーティーをしよう	幼保	74
		なかよしいっぱいだいさくせん	小	75
	図画工作科	いろみずあそび	幼保	76
		カラフルいろみず（造形遊び）	小	77
	生活科	いきものとなかよし	幼保小	78
子ども同士の交流	図画工作科	すなやつちとなかよし	幼保小	80
	生活科	秋のお宝パーティー・あきといっしょに①	幼保小	82
	生活科	秋のお宝パーティー・あきといっしょに②	幼保小	83
	生活科	あきみつけ	幼保小	84
	生活科	京都御苑の交流からの授業・保育展開	幼保小	85
	生活科	もうすぐみんな2年生 Part1	幼保小	86
	生活科	もうすぐみんな2年生 Part2	幼保小	88
	体育科他	3歳児と育成学級との交流	幼保小	90
	総合学習	4年生保育交流	幼保小	91
大人同士の取組	公開保育と事後研修会		幼保小	92
	保育参観と合同研修会		幼保小	93
	公開保育と合同研修会		幼保小	94
	小学校教員の保育園懇談会への参加		幼保小	95
	新1年保護者・児童対象「○○○小オープンスクール」		小	96

御所南小ブロック　研究概要

（御所南小学校、おいけあした保育園、ひまわり幼稚園、中京もえぎ幼稚園）

研究主題

「ひと・もの・ことを大切にして未来に輝く子どもの育成」
～感じ　考え　思考する　そして論理的思考へ～

<テーマ設定の理由>

御所南小ブロックの各校園の教育目標や保育のねらいにおいては、ともに「思考力」の育成を目指していることが分かった。そこで、共通する目指す子どもの姿から、思考力に着目し、5歳児と小学校1年生の育ちの過程やつながりについて考えていくことにした。5歳児の遊びのおもしろさ、楽しさを感じながら考える姿を土台に、1年生では生活科を軸としながら感じ・考え、様々なひと・もの・ことにつながっていく子どもの育成を目指す。

「あきみつけ」でそれぞれが思考しながらつくった楽器をみんなに紹介している。

ビオトープの生き物をみんなで見て様子を想像し、様々に思考している。

電車ごっこの中で使う路線図をどうやってつくるか、友達と共に思考している。

友達の万華鏡を自分でもつくりたいと思い、試行錯誤しながら思考してつくっている。

<御所南小ブロックの研究内容>

子ども同士の交流

安心して小学校へ進学したり、自信をもって過ごしたりできるよう、子どもたち同士が一緒に遊んだり授業や行事に参加したりして交流を深める。

大人同士の交流・架け橋期のカリキュラムの作成・検討

互いの保育や授業を見合ったり、事例検討会を実施して子どもの姿について話し合ったり、架け橋期のカリキュラムの作成と確認、検討を行ったりして、互いの保育・教育を知り、理解を深める。

1. 大人同士の交流

ねらい　子どもだけでなく、大人も関わりをもち、スムーズな子ども同士の交流や、互いの保育・教育の理解を進める。

幼保小顔合せ

幼稚園の環境設定に刺激を受けた小学校教員は、学校に戻ると早速、トイレの環境を工夫した。

かわいいイラストでトイレを明るく

スリッパを揃えやすくするためにイラストを活用

京都御苑での遊びに向けて打合せ

京都御苑で当日に向けての打合せ。子どもの人数、グループ分け、遊びの内容などを話すうちに、それぞれの「ねらい」が異なってくることにも気付けた。

夏の幼保小合同研修

幼保小の先生が共に協議することで、それぞれの関わり方や子どもたちへの願いなど、共通点を見つけたり、見通しをもったりできた。

「見ること」で、互いを「知る」
「知る」ことで、理解を「深める」

園内展や造形展見学

小学校では使わないような材料を幼稚園では使っていることや、年長の子どもたちが作品の見せ方を自分たちで考えていることなどを知り、小学校教員は驚きの連続だった。

保育や授業の参観

入学3日後に、机を向かい合わせにして幼稚園や保育園の時と同じような環境で好きなものの絵をかいている様子を参観し、自分の思いを安心して出そうとしている子どもたちの様子を見ることができた。スタートカリキュラムの具体的な様子を知り、子どもの安心とともに幼保の教職員の安心にもつながった。

幼稚園の帽子取りでは、子どもたちが自分たちでチーム分けをしたり、帽子の数を数えたりしていた。小学校の先生は幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）と照らし合わせながら参観した。幼保と小学校の先生が10の姿を通して共に考えることができた。

大人同士の交流の成果と課題

大人同士が顔見知りになり、親しくなると「あの子は元気に頑張っていますか」と子どもたちを真ん中においた会話が自然と生まれ、忌憚なく意見を伝え合い、子どもたち同士の交流もしやすくなった。また、保育・授業参観だけでなく、行事参観や合同研修等、何度も足を運ぶことで、子どもたちも大人の顔や名前を覚えていき、「知っている先生がいる」という安心感が生まれた。「見る」「話す」ことが互いを「知る」ことへの大きな一歩になるとともに、よりよい交流へとつながっていった。

2. 5歳児と1年生との交流

ねらい　1年間で複数回、交流をすることで、5歳児は「小学校って楽しそう」と感じて安心し、見通しをもって進学できるようにする。1年生は年下と関わって自分自身の成長を感じたり、相手を思いやる気持ちをもったりする。

4月	5月	6月	7月	8月	9月

ごしょであおう!(6月)〈生活科〉

5歳児と1年生とが京都御苑で初めての交流。みんなで元気に挨拶をしたり、返事をする子どもたち。またそれぞれの先生たちの紹介も。子どもたちはまだ少し緊張している様子。

まずはみんなの緊張をほぐすため、大勢で一緒に遊ぶ時間をとった。「1年生の人は出ておいで」という言葉で真ん中に集まった。子どもたちの緊張も少しずつほぐれ、笑顔が見られるようになった。

その後は5歳児と1年生とのグループに分かれて、それぞれ遊びを楽しんだ。
1年生は、「仲良くなれたよ」「また遊びたいな」と振り返りカードに書いていた。

シロツメクサで指輪を作ろう。こうするとできるよ。ほら、かわいい指輪ができた。

スポーツフェスティバルで交流(10月)

スポーツフェスティバル1年生の部に、5歳児も参加。事前に各園で1年生が踊る「ジャンボリミッキー」の動画を見ながら練習し、当日はそこに6年生も加わってみんなで楽しく踊ることができた。
初めての小学校に少々不安げな5歳児もいたが、向かいにいる1年生を見たり近くの6年生を頼ったりしながら踊っていた。

＊1年生と6年生は兄弟学年である。京都御池中学校舎で過ごす6年生は1年生との交流が少ないが、スポーツフェスティバルの準備や1年生の部の開閉会式を担当した。1年生が手に付けているポンポンは6年生が作ってくれたものである。6年生、全員が積極的に踊りに参加していた。

10月　11月　12月　1月　2月　3月

もうすぐ みんな 2年生(2月)〈生活科〉

私も同じ気持ちだったな。何かできることはないかな。

5歳児からビデオレターが届いた。入学前の不安な気持ちを知った1年生は、「私たちが何とかしてあげよう」という気持ちになった。「小学校って楽しいよと伝えたい」というおもいをもとに様々なグループに分かれ、「どうすれば不安や心配がなくなるかな」と考えながら準備を進めていった。

「1年生はたのしいよ」の会に招待(3月)〈生活科〉

小学校に向けて心配していたけれど、楽しんでいたのでぼくたちも安心したよ。

緊張したよ。でも年長さんが笑顔になってよかった。

わたしたちにまかせて!

様々なグループに分かれ、5歳児に色々なことを教えたり、体験してもらったりした。5歳児から「もうちょっとやりたかった」「楽しかったよ。ありがとう」と感想をもらい、1年生は5歳児が笑顔になる様子を見て、自分たちのおもいが伝わったことに安心していた。最後は、「4月に入学してくるのを楽しみにしているよ」「また仲良くしようね」と言って終わった。

5歳児と1年生との交流の成果と課題

1年間で何度か交流を重ねる中で、子ども同士が顔見知りになり、近所の公園で出会ったことなどを報告してくれた。交流をきっかけに親しい関係が築かれていくことが確認できた。
1年生は、「どうすれば年長さんが楽しめるかな」と回を重ねるごとに相手意識をもって思考する様子が見られるようになった。5歳児にとっても、「小学校でも折り紙できるんだ」と幼稚園や保育園と同じ遊びができることに安心する様子も見られた。繰り返し交流することで、5歳児も1年生も「安心」から「成長」、そして「自立」へと変容していく姿が見られた。

3. 幼保の会「にじいろのねっこ」(にじっこ)

ねらい　おいけあした保育園、ひまわり幼稚園、中京もえぎ幼稚園の横のつながりをもち、幼保のカリキュラムを作成し、一緒にカリキュラムマネジメントをする。

<幼保の会の名称を決めよう!>

様々な名前の案を出し合いました。

「にじいろのねっこ」(略して「にじっこ」)に決定!

<エピソードを話し合おう!>

- 互いの園文化を尊重
- ざっくばらんに話す雰囲気
- 無理なくエピソードを出し合う

各園でエピソードを出し合い、話し合った。すると、各園の保育には、違いもあるが、共通する点も見えてきた。「こういうときってどうしたらいいんでしょう」と、お悩み相談が始まったり、「おもしろそう」と共感したりした。文章ではなく写真などで具体的に子どもの話をしたこともあった。

<カリキュラムを作成しよう!>

- 研究主題から項目を決定
- 具体的すぎない
- 抽象的すぎない
- ニュアンスが異なる言葉
- 期間の区切りも相談
- 全園が納得できるものを

具体的すぎると「この活動をせねばならない」となるので、抽象的な表現にした。しかし、抽象的すぎると方向性がなくなるため、研究テーマの「思考力」を軸に作成した。園の文化により学期や季節で期間を区切っているなどの違いを認め合いながら、全園が納得できるように作成していった。そして、人間関係の育ちと思考力の育ちが関連しているのではないか、という案が出た。

人間関係の広がりや深まりと思考力を関連付けたカリキュラムに

<カリキュラムマネジメントしよう!>

2、3年目には、「思考力」に着目したエピソードをもとにカリキュラムを見直していった。見直した箇所は点線を引き、○番号でエピソード番号を入れた。さらに、重要なキーワードは□で囲った。エピソードの検討をもとにしたカリキュラムマネジメントにより、さらに子どもの実態に即したカリキュラムになっていった(カリキュラムはP.38、39に掲載)。また、小学校のカリキュラムも、同様にカリキュラムマネジメントをして見直していった。

カリキュラムマネジメントの実践例

1年目 ◎アイデアを実現していけるような方法を先生も共に考える。

エピソード⑨ 10月初旬 タカシ型

紙飛行機が大好きになり、友達と一緒に毎日のように飛ばして遊んでいるタカシ。タカシが家で自分でつくってきた紙飛行機は、折り紙を2枚使っていて、1枚がおもりのようになっているため、とてもよく飛んだ。タカシが考えたつくり方なので、「この紙飛行機はタカシ型やな!」と保育者が発言したことから、**「タカシ型」という名前と形は子どもたちの間で広がっていった。**

タカシ型の紙飛行機

子どものアイデアを広げたり
友達につなげたりする
ことって大事だよね。

**エピソードをもとに
カリキュラムマネジメント**

2年目 ◎アイデアを実現していけるような方法を先生も共に考えたり、これまでの経験を生かしたり、子どもたちのアイデアを広げたり、つなげたりしてイメージを共有する。

2年目以降は、具体的なエピソードをもとに幼保の先生で一緒に話し合ったことで、他のエピソードとの共通点を見つけたり、大切なことに気付いたりして、さらに子どもの実態に即したカリキュラムになった。

幼保の会「にじいろのねっこ」の成果と課題

にじっこができたことで、3園がお互いをより身近に感じるようになった。にじっこという組織があれば、異動や担当者の変更があっても、連携を継続できる。ただ、会議を実施するには日程調整が難しいので、先を見通して年間予定を立てて進めることが必要であった。今後、さらに近隣の園にも呼び掛け、地域の幼保のつながりを広げていきたい。

3年間の研究の成果と課題

一緒に遊んだり、授業に参加したりして交流をしたことで、子ども同士は互いの校園を身近に感じることができた。また、交流の打ち合わせや事例検討会、研究授業・保育で担任同士が話し合うことで、大人同士の交流も進み、関係性を深めた。さらに、「思考力」について様々な場面で話し合ったことで、互いの保育・教育への理解を深めることができた。

「ひと・もの・ことを大切にして未来に輝く子どもの育成」～ 感じ 考え 思考する そして論理的思考へ～ 御所南小ブロック

共通の視点	5歳児				
月	4 5 6	7 8	9 10	11 12	1 2 3
目指す子どもの姿	遊びのおもしろさ、楽しさを感じながら好きなことを満足するまで楽しむ 自分と向き合って考える 友達と協力して考える 互いの考えを尊重し、共に考える 友達と協同して考えを広げ、深める 小学校に期待をもつ				
子どもたちの経験・遊び	◎園生活の中で自分の好きな遊びをみつけて、満足いくまで十分に取り組む	◎自分の思いに向き合い、試したり工夫したりする ◎友達の様々な思いに気付き、互いに思いを出し合って葛藤する	◎興味のあることをもとに(⑧)、好きな遊びを友達と一緒に楽しみ、アイデアを出し合って遊びを発展させたり、広げていったりして、実現(⑧)する	◎友達と互いの考えを認め合い、折り合い、協力しあって刺激を受け合いながら(⑯)共に遊びをすすめ、満足感や達成感を感じ(⑭)る	◎自分の意見も出しながら友達の意見を聞き、協同して遊びを進める ◎小学校との共通点を感じたり、見つけたりして(⑰⑳)小学校に期待をもつ
思考力を育む 保育者の関わり	◎子どもの思いを感じ取って共感し(①)、引き出したり、共に探ったりして興味のあることを見つけ、期待をもって生活できるようにする(全) ◎先生も一緒に遊びを楽しみ、子どもが安心したり、信頼関係を築いたりする(全) ◎子どもの興味のあることや好きなことを取り入れ、(全)好きな遊びを十分に楽しめるようにする	◎相手の思いを代弁し、様々な思いを感じ取る ◎子どもの多様な考えを受け止める ◎子どもの思いに共感し(②)、自分で気付いたり(③)、考えたり、友達との関わりをもって共に進めることができ(⑤⑦)るように見守り、肯定的に受け止める	◎子どもが困ったり、思いが通らなかったりした際は、互いに(⑪)意見を言い合える機会をもち、自分の思いを言葉にして伝えられるようにする ◎アイデアが実現していけるような方法を先生も共に考えたり、これまでの経験を生かしたり(⑧⑭⑮⑯)、子ども達のアイデアを広げたり、つなげたり(⑨)してイメージを共有(⑫)する	◎意見を聞き合える機会をもち、一人一人のアイデアを生かして遊びが展開していくようにしたり(㉗)、自分の思いと共に友達の意見に納得して折り合えるようにしたりする	◎楽しいことも悲しいことも様々な感情を共有することで深めていけるようにする ◎小学校に安心し、期待をもてるように、小学校で知っている物や人を見つけたり、つながったり(⑰⑳検診・半日入学・交流)する
思考力を育む 環境構成	◎多様な遊びが実現できるようにこれまでも使用してきた物や遊びに必要な物(①)を準備する ◎遊びをじっくりと楽しめる時間と空間を用意する	◎自分なりにじっくりと試行錯誤し(⑤)たり、工夫したりできるようにする空間や時間を用意する ◎遊びから出た必要な物、本などを準備する(②③))	◎子どもたち自身が環境構成に参画できるような時間と空間を確保する ◎アイデアを共有できるように遊びの場や機会、道具などを準備する(⑦⑧⑨⑪)	◎友達同士で(⑲)様々なアイデアが長期的な視点で実現でき遊び仲間の拠点となる場(⑲)や、子どもの時間と空間を確保する	◎クラスなど集団で取り組み、自分と友達の成長を感じ、みんなで相談しながら進められる場を用意する。 ◎小学校への期待をもてるような交流の機会をつくる
子どもの交流	ごしょであおう!	スポーツフェスティバル	秋の御所	あきのあそび	学校は楽しいよの会

※数字はカリキュラムマネジメントの元となるエピソード番号　点線部分は見直した箇所　□は重要なキーワード

「ひと・もの・ことを大切にして未来に輝く子どもの育成」～ 感じ 考え 思考する そして 論理的思考へ～　御所南小ブロック

共通の視点	小学校1年生			
月	4　5（合科的）	6　7（合科的・関連的）	8　9　10　11　12	1　2　3
目指す子どもの姿 遊びや学びのプロセス	感じる　つながる　自分から　未来を切りひらく子ども 先生や友達との関係を築く 知っている友達から輪を広げる 小集団の中で安心して自己を発揮する 成長・自立 グループ活動を取り入れ、クラスメイトとして新たな友達関係を築く 行事を通して、学級の一員としての意識を高めていく 安心 1年間の自分の成長を振り返り、2年生になるという自覚をもつ			
小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成等	・知っていること や 好きな遊び から始める（①） ・知りたい、見たい、調べたい、確かめたい ・実感の伴った言葉で表す	・分析的に考える（見つける、比べる、例える）（③） ・相手や目的に合わせて表現内容や表現様式を考える	・創造的に考える（試す、見通す、工夫する） ・様々な事象と関連付ける ・無自覚なものを自覚化 する（③）	・相手意識 をもって活動する
	活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身につけるようにする。 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。			
思考力を育む指導者の関わり	・保育者の関わり方を知り、子どもと一緒に遊び、信頼関係 を築く（①） ・やってみたい、できるようになりたいと思えるようにする	・これまでの経験 から 解決策を考え たり、友だちと 一緒に考え たり、本で調べたりすることができるようにする（②）	・子どもの意見や考えをつなぎ、子どもとともに創造するようにする（②③）	・成長した自分に気付き、今後の自分の成長におもいや願いがもてるようにする
	うなずく・共感する・納得する・驚く・広げる・ほめる・伝える（子どもと共に）			
思考力を育む環境構成	・ブロック や 折り紙、向かい合わせの机、机の無い広い場所での活動（就学前施設に近い環境 作りで 安心感 をもち 自己発揮 できる） ・学習のきっかけ作りとなる掲示 ・?!☆などを使用した板書 ・おもいや願いがふくらむ学習活動	・二人組、グループ活動 ・子どもたちの気付きを 視覚的にわかりやすく まとめた板書 ・一つ一つに じっくり と関わったり、繰り返し 関わったりできるような時間 ・困りを共有 し 解決策をみんなで考える 経験（②）	・自分や友達、教師、ものとの関わりの中で、「気付き→考え→行動する」ができるような場と時間 ・試行錯誤 したり、友達と考えを深めたりできるような場（③）	・一人一人が以前の自分より向上し、成長したことに気付けるような環境
	人・もの・こととの出会わせ方を工夫する　具体的な体験や活動を行う　子どもの姿を丁寧に見取り、働きかけ、活動の充実につなげる			
子どもの交流		御苑で一緒に遊ぶ（ごしょであおう!）	スポーツフェスティバル一緒にダンス（招待） 秋の御苑で一緒に遊ぶ あきのあそびを一緒に楽しむ（オンライン・招待）	学校は楽しいよの会（招待）

※数字はカリキュラムマネジメントの元となるエピソード番号　点線部分は見直した箇所　□は重要なキーワード

下京雅小ブロック　研究概要

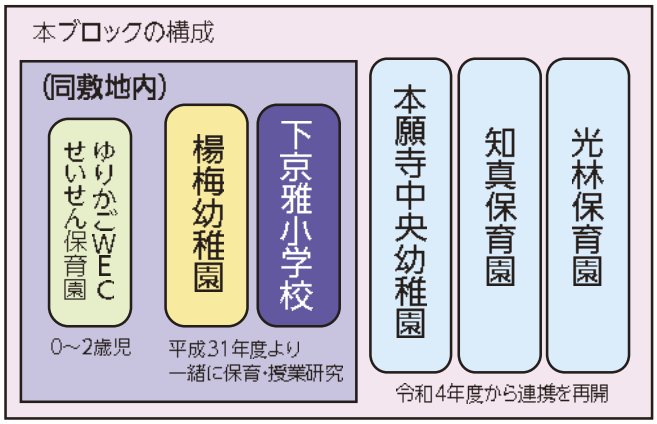
（下京雅小学校、光林保育園、知真保育園、本願寺中央幼稚園、ゆりかごWECせいせん保育園、楊梅幼稚園）

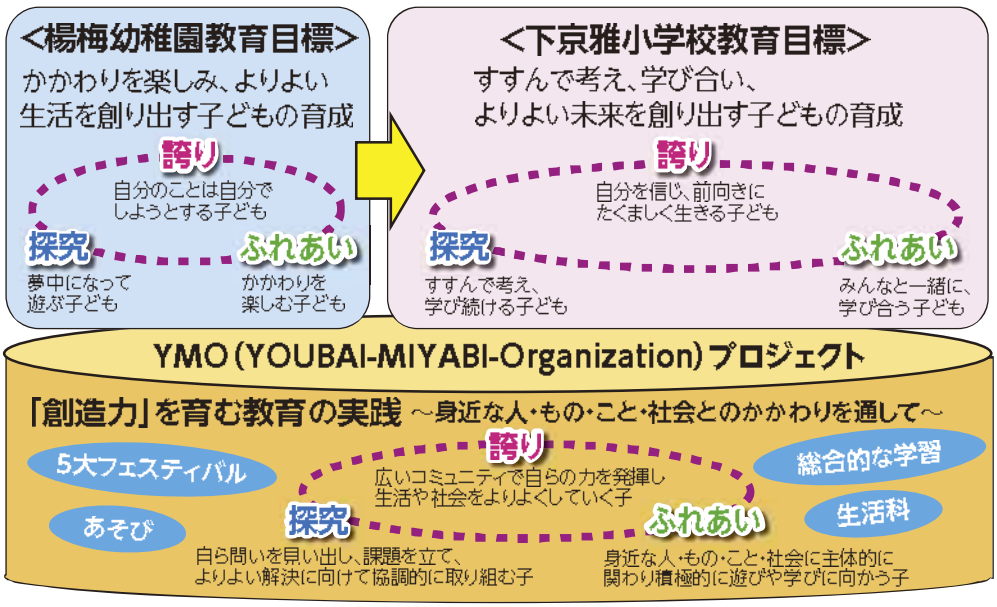
研究主題

『自ら学ぶ力』を高めることを目指した、『心が動く』教育の創造
～幼保小が一体となり、架け橋期にふさわしい保育・学習の在り方を探る～

1.ブロックの概要

本ブロックは、下京雅小学校と5つの就学前施設から構成されている。楊梅幼稚園とゆりかごWECせいせん保育園は、下京雅小学校と同敷地内にあり、ゆりかごWECせいせん保育園については0～2歳児対象の小規模保育園である。また、光林保育園・知真保育園は、校区内にある施設であり、本願寺中央幼稚園は、入学児童が複数いる近隣の幼稚園である。





下京雅小学校と楊梅幼稚園とは平成31（2019）年から一緒に保育・授業の研究をしてきている。つけたい資質・能力を共有し「遊び」と「学び」のつながりを意識した取組を、保育や授業、日常生活や行事の中で進めている。

フェスティバルで

一緒に遊んで

保育・授業で

2. 活動内容

(1) 5歳児を小学校へつなぐ

入学式

児童机やいすは置かず、カーペットを敷いて遊べるように。

安心

半日入学でも

就学前施設の教員と協力し、教室を就学前施設に近い環境に

スタートカリキュラム

入学後数週間は、歌や絵本の読み聞かせ等、就学前施設での活動を参考にしたり、授業時間や教科にとらわれることのない合科的・関連的な指導をしたりしている。また、入学後早い時期（4月中旬）に、子どもの発達や学びの様子、指導の在り方などを全教職員と幼保の教員で共有する機会（スタートカリキュラム研修会）を設定し、1年生の児童が学校生活のスタートを安心して過ごせるようにしている。

(2) 遊び（保育）と学び（授業）をつなぐ

公開保育・公開授業

授業を知る

令和5年度の例

<公開保育>
6月9日（金）
〈3歳・4歳・5歳〉
<公開授業>
6月23日（金）〈1年〉
9月15日（金）〈6年〉
10月13日（金）〈3年〉
<YMO 研究発表会>
11月24日（金）
保育〈3歳・4歳・5歳〉
授業〈2年・4年・5年〉

保育を知る

主体的・対話的で深い
学び

自ら学ぶ力

子どもの「心が動く」環境・活動・働きかけ
遊び

保育や授業を参観し合うことで、小学校の学びの現状や園での保育の様子を互いに知る良い機会となっている。参観後、子どもたちの様子や指導の在り方について一緒に協議することで、相互理解が深まっている。

(3) 子ども(園児)と子ども(小学生)をつなぐ

①「あきといっしょに」梅小路公園(下京雅小学校・楊梅幼稚園・本願寺中央幼稚園)

・単元のねらい (小学校)

秋の身近な自然を観察したり利用したりするなどの遊ぶ活動を通して、季節の違いや秋の特徴を見つけたり、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、秋の様子や四季の変化、自然を利用した遊びの面白さや自然の不思議さに気付くとともに、身近にある自然を取り入れて生活を楽しくしようとしたり、遊びを創り出そうとしたりすることができるようにする。

本時のねらい

(小学校)
園児との秋見つけを通して、園児と関わることや秋を見つけることを楽しむことができるようにする。

(幼稚園)
1年生に安心感や親しみ、憧れの思いをもって関わろうとする。地域の幼稚園や保育園の同年齢の友達と一緒に過ごす雰囲気を感じ、安心感や居心地のよさを感じる。

事前打ち合わせ

梅小路公園で

グループ編成

互恵関係

活動内容

日時・スケジュール

交流の様子

当日までに動画や手紙で園児を誘ったり、グループ写真を交換したりして、会える喜びを高めた。

出会い

待ち合わせの場所で園児を見つけて大喜びでバンザイ。あまりの嬉しさに園児たちのところへ駆け寄る姿も。みんなでエビカニクスを踊ったときは小学校の先生だけでなく、幼稚園の先生も前に立って活躍するように役割分担をした。

初めて会った違う園の子どもたち。すぐに仲良くなる姿。子どもは仲良くなる天才だと感じた。

秋見つけ

いつもよりも少しお兄さん、お姉さんになった1年生。園児に優しく接する姿がとても頼もしかった。

お弁当

打ち合わせの時は、小学校は帰って給食を食べると言っていたが、2園が「一緒に食べましょう」と盛り上がり、小学校もお弁当を食べることに。食事を共にして、元気いっぱい一緒に遊んで、もっと仲良くなれた。

1年生の存在があって安心できた園児たち。園児と関わることで成長できた1年生の姿が見られた。

遊び

またね

「また必ず会おうね」と、約束。1年生は、幼稚園の先生とも会う約束をしていた。

梅小路公園で交流活動を行った。1年生と2園の5歳児で1グループ8人程度のグループを作り、ドングリやきれいに色づいた葉っぱを探し回ったり、鬼ごっこやバルーン遊びなどを楽しんだ。
園児も小学生も、とても楽しく活動ができ、楽しかったことやお互いの存在が心に残る交流になった。園児は小学生や他園の子どもの刺激をもらい、小学生はお兄さんお姉さんとして行動できて、互恵性のある交流になった。「また、交流をしましょう」と幼稚園の先生からの提案があり、新たな交流のスタートにもなった。
今回はできなかったが、秋見つけのあと、秋のおもちゃをつくって、一緒に遊ぶという交流も可能である。単元を通して、園児と小学生が継続して関わることも、教育的意義が大いにあると思われる。次年度につなげたいと思う。

②「もうすぐ2年生・学校探検」（下京雅小学校・知真保育園・本願寺中央幼稚園・楊梅幼稚園）

3月には、ブロック内の施設の5歳児が本校に集まって、1年生が学校紹介をする活動を行っている。小学校の子どもたちからのインタビューをきっかけに、各園で「学校について知りたいこと」を子どもから聞いて、手紙やポスターをつくり、1年生の教室前に掲示した。そのことで、活動への意欲がわき、「幼稚園や保育園の人のために考え、準備をする」「当日を楽しみに待つ」等、主体的に活動することにつながった。
当日、1年生はグループに分かれて、学習や給食など学校生活の様子を5歳児に説明したり、校内を案内したりした。1年生は、自分たちより小さい子に伝えたい、案内したいという思いをもって活動することで、主体的な学びにつながっている。
5歳児にとっては入学前に小学校のことを知ることができ、1年生とともに活動することで、人や場所に、より安心感をもち入学を迎える良い機会となっている。（詳細はP.86を参照）

③日常的な交流が生まれる

ゆりかごWECせいせん保育園とは、アートフェスティバル（作品展）で作品交流を続けてきている。意図的に設定した子ども同士の交流活動はないが、校内を散歩に来ていた2歳児に対して、絵本コーナーで2年生の児童が自発的に読み聞かせをしている姿が見られた。架け橋プログラムの取組の中で育まれた力が発揮された場面であった。

(4) 保育者と授業者をつなぐ

公開保育・授業の事後研修会

直接、思いを伝え合う

相互理解を深める

子どものために
「つながり」を意識した
よりよい「遊び」「学び」の実現

『違う』が当たり前!
『違う』を受け入れる!

合同研修会

交流の打ち合わせ

つながりを意識したよりよい「遊び」・よりよい「学び」の実現のため、教員同士がつながりをもつことは大切である。直接、思いを伝え合うことのできる場面を設定し、『違う』ことは当たり前であることを受け入れ、互いの子どもたちのために何ができるかを考えるようにしている。

3. 成果と課題（小学校教員及び就学前施設の保育者のアンケートより）

◇「子どもたちにとって良い取組」と感じているかを、「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「思わない」の中から選ぶようにした。その結果、7割以上の教員が「とてもそう思う」と答え、残りの全てが、「そう思う」と答えた。否定的な回答をした教員はいなかった。

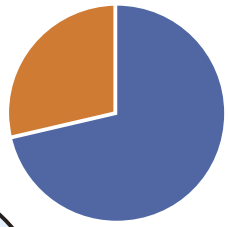
幼稚園児と交流する小学生の姿を見ていると、より相手意識をもって活動をすることができたと感じている。

小学生への憧れ、期待が高まった。また、このような活動があることで、家庭でも小学校について話題になり保護者の方の安心感にもつながったように感じる。

小学生にとって年下の子たちを大事にする機会や自分の成長を知る機会になると思うから。

安心したり憧れたり、いたわる気持ちが出てきたりと、幼保小の子どもたちがそれぞれに感じたり学んだりしていると考えるため。

子どもたちにとって良い取組だと思いますか



小学校への入学に対し、前向きに捉えられる子が多かったように感じたため。

子どもの成長をロングスパンで見ることや幼稚園と小学校それぞれ専門性が異なる視点で子どもたちを見ることが大切だと感じるから。

自分たちが小学生にしてもらっているように、園児同士でも、年下の子どもたちに優しく接している。

小学生は幼稚園児にやさしさや思いやりをもって取り組むことができ、自己肯定感の高まりにつながっていると思う。

<1年生にとって>
やさしさや思いやり
相手意識をもって活動
主体的な活動
自己肯定感の高まり
自信と自覚
成長を実感

<5歳児にとって>
やさしさや思いやり
年長児として年下をいたわる気持ち
安心感
1年生への憧れ
期待の高まり
入学に前向き

小学校教員の意見

就学前施設保育者の意見

子どもの変容

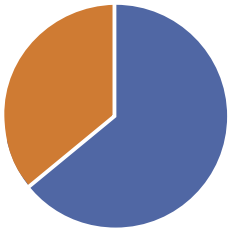
◇「自分（教員）にとって良い取組」と感じているかを、「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「思わない」の中から選ぶようにした。その結果、6割以上の教員が「とてもそう思う」と答え、残りの全てが、「そう思う」と答えた。否定的な回答をした教員はいなかった。

就学前施設教員の子どもに対する接し方を知ることで、自分自身の教育に活かすことができたから。幼児教育を見て知ることで、自分の教育観が変わったから。

互いに子どもたちのことを知るとともに教師同士の関わりも深まるから。

就学前の子どもたちがどのように活動に熱中していくのかということは、思っていた以上にそのまま小学生にも使えるということが分かったから。

教員にとって良い取組だと思いますか



自分の視野の広がりや深まりにつながり、よりよい保育の創造につながるから。

小学生の姿から授業への取組の様子がうかがえ、送り出す側として大きな安心を感じたから。

就学前の取組を知ることで、子どもが主体的に授業に取り組むための手立てなどを考えることができるから。

今まで知り得なかったことを学ぶ機会となっている。小学校の先生と話をする機会が増え、何でもない子どもの姿や小学校の取組について話し合えるから。

日々の授業改善につながっていると思うから。

教員の変容

<小学校教員にとって>
日々の授業改善
「遊び」と「学び」のつながりを実感し、子どもの主体性を大切にする授業展開に役立っている。

<就学前施設教員にとって>
送り出す安心感
送り出した子ども達がどのような小学校生活を送っているか知ることで、安心感や保育改善に役立っている。

まとめ

本ブロック内でも、これまでの関係性や地理的な条件で、園によって教員の関わり方や子どもの交流活動の内容や回数が違っている。しかし、様々な条件の中でできることを工夫しながら、子どもたちにとっても指導者にとっても、互恵的で持続可能な取組を今後も積み重ねて、子どもたちの『自ら学ぶ力』を高めることにつなげていきたいと考えている。

架け橋期のカリキュラム（5歳児）

[　　]は各視点における年度当初の子どもの姿　[　　]は各視点における年度末の子どもの姿

下京雅小ブロック

共通の視点		5歳児 4月 5月 6月 7月 8月	9月 10月 11月 12月	1月 2月 3月
ねらい		【新しい環境に安心、年長になった喜びと自覚 】 友達と関わって遊ぶ中で、思いを出し合いながら遊ぶことを楽しむ。 年長児になった喜びを感じ、自覚をもち、生活を進めようとする。	【 遊び、友達の広がり、目的の共有 】 自分のめあてや友達と共通のめあてをもったり 、遊びを進めたりすることを楽しむ。 小学生との交流を通して、小学校への憧れや進学への期待を感じる。	【 皆で楽しむ満足感、小学校への期待 】 共通の目的をもって協同して遊びを進め、満足感を味わう。 自分や友達の成長を感じ、1年生になる期待をもつ。
内　容		【生活】新しい環境での生活の仕方がわかり、安心して園生活を楽しむ。 【友達】年長児になった自覚をもち、異年齢児とのふれあいや関わりを楽しむ。気の合う友達と思いや考えを伝え合い、共通の目的をもって遊ぶ楽しさを味わう。 友達とルールを考えたり、守ったりしてルールのある遊びを楽しむ。	【生活】自分の思いや考えを言葉で伝え、クラスで話し合い、遊びを進める楽しさを味わう 。 【友達】友達と共通のめあてをもち、力を合わせたり、役割を分担したりして遊ぶことを楽しむ 。	【生活】これまでの生活を振り返ったり、年中児に生活を引き継いだりして成長を自覚し、自信と期待をもって修了する。 【友達】友達と共通の目的に向かって力を合わせて遊びに取り組み、達成感や充実感を味わう。
連携	園	小学校と就学前施設の担任同士で、小学生との交流について、具体的な計画をする	小学校のフェスティバルや交流活動などに参加し小学生との関わりを楽しむことができるように事前、事後に担任同士で打ち合わせをする。	安心して進学することができるように一人一人の育ちを共有するとともに小学校に伝える。次年度の交流の計画を立てる。
連携	家庭	家庭訪問や懇談会で保護者の思いや子どもの家庭での過ごし方などを把握し、遊びや関わりに生かす 。	子ども同士のかかわりの深まりとともに思いのぶつかり合いなどもみられるが、学びや成長につながることを伝え、理解につなげる。	一人一人の子どもの成長を共に喜び、保護者も小学校への安心感と期待を持つことができるようにする。
すすんで学ぶ	幼児	[身近な環境に興味をもって関わり、繰り返しやってみようとする] 色水などの素材での遊びなどで友達に思いを伝え、繰り返し様々な方法を試しながら遊ぶ。様々な環境に自分からかかわって遊ぶ。思考力の芽生え	どうすればみんなで思いを合わせて遊びを進めていくことができるのか、自分の思いを伝える。道徳性・規範意識の芽生え やりたいことに強い思いをもち、より本物らしくなど、自分のイメージに近づくことができるよう友達と思いや考えを伝え合いながら工夫しようとする。協同性	経験を活かして、より自分の思いを実現できるものを工夫してつくったり、友達からの刺激を取り入れながら、試行錯誤したりする。豊かな感性と表現 [身近な環境に興味をもって関わり、試したり考えたりしようとする 。]
すすんで学ぶ	教師	子どもが進める遊びを受け止めながらイメージや思いを実現できるように方向付けや提案をしていく。	自分のめあてをもって遊ぶことができるように思いを確かめたり、励ましたり、認めたりして関わる。	自分なりに感じたことや考えたことが集団の中で生かされるよう助言する。
すすんで学ぶ	環境	今まで経験したことがある材料用具に加え、遊びの様子を見ながら新たなものを考えて出したり、場をつくったりする。	目的をもって製作したり協力して遊んだりできる場や要求に応じられる材料や用具、器具などを用意する。	イメージを膨らませて表現したくなるように絵本や図鑑など子どもの要求に合わせて用意する。
楽しくかかわる	幼児	[友達や先生、様々な人・もの・ことに関わろうとする] 友達と一緒に、互いのしたいことを受け入れながら、遊びを進める。 言葉による伝え合い 動植物の世話など、自然環境にふれ、関わって遊ぶ。自然との関わり・生命尊重	運動会の行事や、交流活動などで関わりをもっている1年生や他学年の小学生、他の就学前施設の友達などに思いを馳せ、心を寄せて遊んだり、楽しさや嬉しさを共有したりする。地域のゲストティーチャーとの関わりを楽しむ。 社会生活との関わり	お正月の遊びや楽器遊び、劇ごっこの遊びなどで、文字や数字、図形、数量に興味や関心をもったり、先生や友達と一緒に 、必要感をもって活用しようとしたりする。 数量 ・図形、文字等への関心・感覚 [さまざまな人・もの・ことと出会い、自分の思いを表現して関わり合おうとする。]
楽しくかかわる	教師	教師が一緒に遊びながら一人一人の興味・関心を捉え、信頼関係を気づいていく。	共通の目的に向かって遊びに取り組めるよう相談の場をつくったり振り返ったりする時間をもち、それぞれの思いをつないでいく 。	これまでの生活でのいろいろな人との関わりを思い起こし、感謝の気持ちにつながるように投げ掛けたり、思いを受け止めたりする。
楽しくかかわる	環境	子ども同士がかかわって自分たちで遊びを進めることができるように遊戯室や園庭・校庭などを積極的に活用する。	1年生に親しみをもち一緒に遊ぶ楽しさが感じられるよう、園内外での交流保育の機会を設け、交流を楽しみにすることができるように事前に手紙などをやり取りし、掲示しておく。	カードゲームなど、遊びを通して文字や数量、形や色に興味をもつことができるような場を設ける。
自分でできる	幼児	[安心して 、自分の思いを十分に出そうとする。] 自分の思いだけでなく、友達の思いも受け入れながら遊びを楽しんでいくことに満足感を得る。年少児や年中児に親しみをもって関わる。自立心	運動会の遊びなど継続して遊ぶ中で力を出しきることに満足感を感じ、また、交流など新たな関わりの広がりを楽しみ、そのことが自信となり、苦手なこともやってみるなど生活を広げる。健康な心と体 自分が実現したことを、友達や小学生に認めてもらうことに喜びを感じたり 、実現したいことが達成できた満足感を味わったりする。社会生活との関わり	クラスのみんなで同じ思いをもち、みんなで満足感や達成感を味わう。自立心 力を発揮して実現できたことに自信を感じ、進学への期待や意欲をもつ。自立心 [安心感をもち、自分でできる喜びを感じ、ありのままの自分を発揮しようとする。]
自分でできる	教師	年長児になった喜びに共感し、自分でしようとする姿勢や異年齢児に思いを寄せて自分なりに関わろうとする姿を認める。	たくさんの友達の中で力が発揮できているか、役割分担をしながら遊びを展開できているかを把握し、助言をしたり、認めたりする。	一人一人の力を十分発揮し、クラスの一員としてやり遂げた満足感や達成感が得られるように認めたり、励ましたりする。
自分でできる	環境	年長の自覚がもてるように、担任間で連携して異年齢児との関わりのきっかけをつくる。	体を十分動かして遊ぶ楽しさが味わえるように運動遊具を配置したり、子どもが遊具や用具を自分たちで出し入れしたり、遊びの場をつくったりできるように場を整えたりする。	進学への安心感と期待感に繋がるよう、1年生を始め小学生との関わりが楽しめるような時間や場を設ける。
個別の支援		友達と関わりをもちにくい子どもには、思いの橋渡しをしたり、代弁したりして関わりを楽しめるようにする。 友達に認められる嬉しさを感じ、関わって遊ぶ楽しさを感じられるよう、友達に認められる機会を設ける。	クラスみんなでの活動に入りにくい子どもには、その子どもがやりたいことや思いを受け止めクラスで共有したり、楽しんでいる様子を見せたりなど、興味をもてるよう関わる。友達だけで遊びや生活を進めにくい時は仲介役として一緒に遊びや生活を共にし、思いや考え、イメージの橋渡しをする 。	進学への不安を感じる子どもには、これまでの成長を大いに認め自信にするとともに、進学への前向きな言葉をかけ、安心できるよう関わる。

[　　] 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

架け橋期のカリキュラム（1年生）

□は各視点における年度当初の子どもの姿　□は各視点における年度末の子どもの姿

下京雅小ブロック

共通の視点		1年生 4月	5月頃	6月	7月頃	9月 10月 11月 12月	1月 2月 3月
ねらい		【安心】 学校生活に慣れ、安心して登校する。 先生や友達と仲良くなり、自分の学級・学年で安心して過ごす。 先生や友達に親しみをもち、安心感のある学校生活を過ごす。 就学前施設で身に付けた力を発揮し、自信をもって主体的に生活する。			【成長】 →集団生活のルールが分かり、集団生活に慣れる。 →クラスや学年が自分の居場所となり、安心して過ごす。 →自分のことが自分でできる、仲間と共によりよい学校生活を送る。 →学校生活がほぼ分かり、自信をもって学習や生活に取り組む。	【自立】	→自信をもって小学校生活を送る。 ・自らすすんで学ぶ ・みんなと楽しくかかわる ・やれることは自分でできる
内　容		【生活】学校での生活の仕方が分かり、安心してすごす。（生活・学習・給食・遊び・当番活動・登下校など） 小学校生活の新たなルールが分かり、安心して自分で取り組もうとする。　→生活の仕方で分かることが増え、より安心することで関わりを広げる。 集団生活のルールが分かり、穏やかな気持ちで過ごすことができる。　→自分のことが自分でできることに自信をもち、新しい環境に自ら働きかけ、関わる。 【友達】教師や友達と一緒に学校生活を送ることを楽しむ。 知っている友達との関係を大切にし、新たな友達とも関わろうとする。　→クラスの友達の名前を覚え、関わりを広げる。 学校の様子が分かり、友達と共に活動することを楽しむ。　→仲の良い友達の輪を広げながら、学習や遊び、生活が充実する。					
連携	学校	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえる。園で慣れ親しんだ歌や手遊び等を取り入れ、楽しみ、安心し、意欲につなげる。 就学前施設の保育者から情報を得て、指導に生かす。 就学前施設の保育者に小学校での様子（学習・生活）を見てもらい、情報を共有して指導に生かす。 就学前施設の担任と一緒に、交流について具体的な計画をたてる。			交流の事前・事後で担任同士が打ち合わせをする。		次年度の交流について計画をたてる。
	家庭	不安な状況等は早目に伝えてもらうようあらかじめ話しておく。連絡帳を活用したり、直接話したりして、安心してもらう。 ほめ電話（ほめTEL）で、児童の様子を伝えて安心してもらう。					
すすんで学ぶ	児童	□身近な環境に興味をもって関わり、試したり考えたりする。	自分の見たい・知りたいところを探検する。 身体や感覚を働かせて、思いきり遊ぶ。 就学前施設での経験を生かして、遊んだり学んだりする。		→学校でのはてな?やふしぎ?を見つける。 →自ら友達や環境に興味をもって関わり、遊んだり勉強したりする。 園児との交流をよりよく工夫する。		→主体的に自己を発揮しながら学びに向かう。 □身近な環境に興味や疑問をもち、自ら学び考えようとする。
	教師	幼児期の発達の特性を知り、児童の意欲が高まるように配慮する。 児童の興味・関心をつかみ、主体的に学習（生活）できるようにする。			→生活科を中心に、授業の流れ（しかけ）を工夫する。 →生活科を中心に、合科的・関連的な指導の工夫をする。		→意欲的に遊びや学習に取り組む姿を認め、より主体的な意欲につなげる。
	環境	学習や生活、遊びのスタイル&ストーリー（生活習慣・学習習慣・遊びの場・給食の準備や片付けなど）を大切にした環境や一日の流れをつくる。 学習形態を工夫し、協働的に学べるようにする。（グループ机、広いスペースの活用など）学習に集中できるようにする。（すっきり、はっきり、視覚的）学習のきっかけが生まれるようにする。（しかけ、学びの足跡など）					
楽しくかかわる	児童	□さまざまな人・もの・ことと出会い、自分の思いを表現して関わり合う。	知っている友達と安心して関わる。 担任・学年の先生と仲良くなる。 友達と挨拶したり、名前を覚えたり、遊んだりすることを喜ぶ。		→知っている友達から少しずつ友達の輪を広げる。 →少しずつ教師や地域の人とも関わり、楽しむ。 園児との交流を思いきり楽しむ。		→友達が安心の基地になり、生活が充実する。 →なかよしの仲間と活発に遊んだり、みんなで勉強したりする。 □互いの思いを出し合い、みんなで頑張ろうとする。
	教師	保育者の関わり方を知り、児童と一緒に遊び、信頼関係を築く。 新しい教師や友達、環境の変化に戸惑う児童に寄り添い、関わる。 園児との楽しい交流を計画する。			→全教職員が関わり、信頼関係を築く。 →友達関係の様子を見て、子ども同士をつなぐ支援をする。 →交流への思いが高まるような活動を考える。（手紙など）		→集団のルールの必要性を伝え、自ら守ろうとする姿を認める。 →みんなと関わり、がんばることの楽しさを感じられるようにする。 →交流での経験を生かして1年生を迎える気持ちが高まるようにする。
	環境	教師や友達、他学年の児童、地域の人々と関わりがもてるような環境や機会を意図的に設定する。 （全教職員で一緒に楽しむ・温かく見守る・子どもの目線で話を聞く・笑顔で迎えるなど）（他学年児童と集団登校・集会活動・たてわり活動など）（家庭や地域の人々の見守り活動）					
自分でできる	児童	□安心感をもち、自分でできる喜びを感じ、ありのままの自分を発揮する。	就学前施設でしていた遊びで遊ぶ。 就学前施設での経験を話したり、伝えたりする。 自分でできることは、自分でする。		→少しがんばればできることにチャレンジし、できた喜びを味わう。 →友達のステキを見つけ、伝え合う。 →自分ががんばったことやできるようになったことを考えていく。 園児との交流の中で自分のできることを最後までやり切り、振り返る。		□自分の姿を見つめ、頑張りや良さを見つけようとする 。
	教師	幼児期で身に付けた力を発揮できるようにする。 1年生になった喜びを受け止めつつ、安心感がもてるように関わる。			→不安を表す時期の個人差を受け止め、安心できるように関わる。 →自分でできるようになっていく姿を認める。		→単元の終末のふり返りを大切にする。 →できるようになったこと、ついた力を知らせ、認める。
	環境	見通しをもって生活できるようにする。（1日の流れ・朝の支度の手順・当番などの役割表示）自分で選択して活動できるようにする。（教室内の遊びコーナー・オープンスペースの活用など） 生活上のきまり等を視覚的に理解できるようにする。（道具箱の整理整頓・靴のそろえ方など）					
個別の支援		不安な姿を見せる児童には個別に関わり、安心できるようにする。できるだけ複数の教員を配置し、個人・学級に目が行き届くようにする。 生活の仕方（トイレ・手洗い等）に戸惑う児童には丁寧に関わる。支援が必要な児童には、担任を中心に、複数の教員が関わるようにする。 児童の遊びや人間関係を観察し、うまくかかわれない児童には積極的に声かけをして、一緒にグループに入れるようにする。					

竹田小ブロック　研究概要

（竹田小学校・改進保育所・竹田幼稚園）

研究主題

「夢に向かい、つながりの中で主体的に生きていこうとする子」の育成

～一人一人がいきいきと輝くために～

1 幼保小の架け橋プログラムの経過について

幼保小の架け橋プログラムに取り組む以前から幼保小3施設（竹田小学校・改進保育所・竹田幼稚園）の連携・交流は行ってきた。

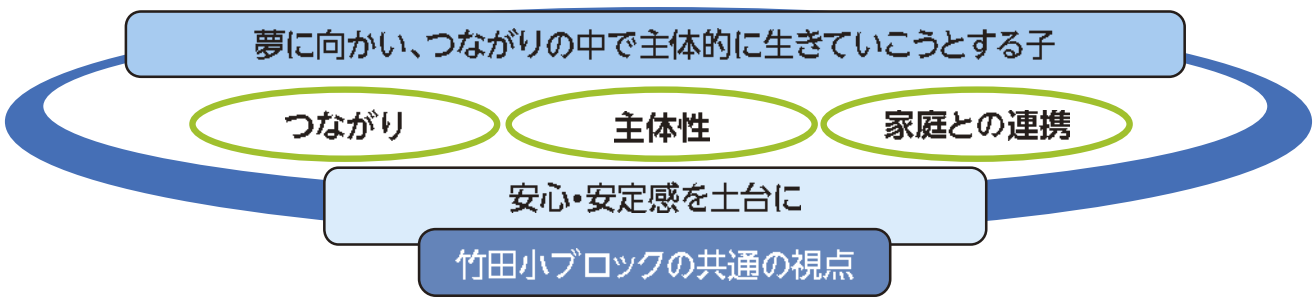
交流目的（①②は子どもについて、③は教職員について）

① 同じ地域に生活する子どもたちが交流し、知り合う機会にする。
② 保育所・幼稚園から小学校にスムーズな接続ができるようにする。
③ 「地域の子どもは地域で育てる」理念の下、同じ地域に生活し、竹田小学校に進学する子どもを中心にみんなで子どもを見て、子どもを知る機会にする。

交流内容

① 幼保小交流
　11月音楽会、2月生活科交流（にこにこタイム）
② 幼保交流
　5月グループ作り、7月プール交流、10月合同運動会
　11月地域行事参加、2月音楽コンサート、3月4歳児交流
③ 教職員交流
　4月連絡会（小学校授業参観）、5月連絡会、6月幼稚園参観、8月保育所参観、8月連絡会、11月連絡会、3月連絡会

以上のような連携・交流を土台に、幼保小の架け橋プログラムの取組をスタートさせた。まず、子どもの実態を出し合い、共通の視点を話し合い、架け橋期のカリキュラムを作成した。
子どもの実態から、期待する子ども像を、【夢に向かい、つながりの中で主体的に生きていこうとする子】、共通の視点を「主体性」「つながり」にした。また、保護者は学校園所への信頼は厚いものの、家庭での子どもへの関わりなど迷われることも多く、「家庭との連携」も加え、進めることとした。



子どもの交流活動に加えて、教員・保育者間の交流を深めていった。特に、公開授業・保育や交流活動などの事前・事後研修を丁寧にすることで、授業・保育のねらいや子どもへの願いなどを共有し、教員・保育者同士が少しずつ意見交流できるようになり、その中で、子どもの育ちがつながるように、架け橋期のカリキュラムの加筆・修正を行ってきた。また、それぞれの教育を知る“架け橋コーナー”を各校園に設置し、交流の様子やそれぞれの施設での活動を紹介し、教職員や保護者へ発信してきた。

2 交流から接続への転換（学びの連続性と子どもの見取り方）

教員・保育者間で話をしたり、互いの教育を見て学んだりすることで、教員・保育者の意識も変わってきた。

① 幼保小交流 5月22日・24日
図画工作科「すなやつちとなかよし」 幼稚園・保育所「砂遊び」

＊詳しくはP.80参照

小学校教員

幼保の先生は、裸足になって一緒に遊びながら、子どもたちが「できた!」と満足するように、さりげなく援助しているんですね!

幼保保育者

学校の先生は、全体を見て、一人一人がどんなことを感じたり、学んだりしているのかを、見ているんですね。

交流後の子どもの変化

【5歳児】1年生と遊んだことが刺激となり、砂場での遊びが深まった。交流の時につくった火山を再現したり、鬼が島や魚つりなどのごっこ遊びに発展したりしていった。

【1年生】幼保の友達のことを身近に感じ、話題にしたり、隣接する幼稚園に関わりにいったりするようになった。

②公開保育「すみれセンター（科学センターごっこ）」5歳児 6月27日

科学センターへ行った経験から、自分たちのすみれセンターをつくり、お客さんや友達とのやり取りを楽しむ。

「楽しかった」という実体験が、“やってみたい”“見てほしい”という気持ちに膨らんでいく。心が動く実体験を、幼児期に十分しておくことが大切ですね。

幼保保育者

生活科では2年生が1年生を招く単元がある。2年生にしかできないと思っていたが、幼稚園の5歳児が年少組をお招きしていた。もっと子どもたちに任せても、できるのかも!

小学校教員

5歳児の子どもたちが、自分の言葉で案内したり、説明したりしていた。学校では、言葉を決めたり、セリフを覚えたりしているが、その場に応じて臨機応変に話せた方が1年生の学びになるのではないかな。

小学校教員

生活科の授業づくりへ

③公開保育「保育所0～5歳児の遊び」8月21日～23日

小学校・幼稚園全教員が参観し、その後、事後研修をする。

各クラスの遊びの内容や援助などを記載した日案をもとに、子どもの姿を見取る。

公開保育

幼保保育者

同じ活動でも、保育のねらいによって、活動の見方、捉え方が変わってくる。子どもの実態や教師の願いから、ねらいをもつことが大切。

事後研修会

やりたいことが実現できる環境が学びの基本。自分で動ける環境が主体性を育むのではないか。

小学校教員

④公開授業・生活科1年生「いきものとなかよし」10月20日

合同指導案検討会

子どもが主体的に学習するための援助について、指導案や幼児期の生き物との関わりについて話し合う。

話し合い① 生き物の説明の仕方について

小学校教員

6月に見た保育で、5歳児の子どもたちが自分の言葉で話していたので、それを目指したいけれど…。

教師側も、子どもたちが説明の紙を持っていると、困っている時に援助しやすいので、安心なんですよね。

小学校教員

紙を持たずに発表することにしよう。不安な子どもは、話すポイントを書いた紙をもつことにすれば、安心できるかな。

幼保保育者

生き物の説明を書いた紙を持つと、読むことに必死になっている姿があった。

でも、生き物を介して自然に説明する姿がありましたよ。

自分の言葉で話すことで、相手を意識して、発表する側も聞く側も意欲が向上!!

原稿を読まず、自分の言葉で話すことで主体性がUP!

話し合い② 生き物について

小学校教員

自分たちが、捕まえた生き物や、身近にいるもののほうが、興味がもてますね。大切に育てることで愛着も湧いてきますね。

身近な生き物に思いをもって関わることで主体性がUP!

幼児期でも、だんご虫やバッタなどを捕まえたり、蝶を羽化させたりして育てる経験をしてますよ。

幼保保育者

話し合い③ 環境について

幼保からのアドバイスを生かして、丸形の水槽を設置!大きな写真でわかりやすい幼稚園の図鑑を配置して、自ら調べやすく。

自ら動きやすい、友達と関わりやすい環境を構成して主体性がUP!

子どもが意欲的に活動
子どもが生き生きとした授業

幼稚園では、丸い入れ物で飼育することもあります。みんなで見られるので、友達同士がつながりやすいですよ。

幼保保育者

幼稚園に生き物や自然の絵本がたくさんあります。1年生にとっては、調べやすいかもしれないですね。

活動や授業を振り返って

- 幼児期の子どもの学びや育ちを実際に見ることで、“1年生にはできない”という思い込みが変わり、子どもの興味や思いに寄り添う授業へと変わった。授業だけで終わるのではなく、子どもたちが生き物を継続して育て、思いをもって関わることで、意欲的に、より主体的な姿がみられるようになった。
- 幼保小の教員が、指導案検討から一緒に生活科の授業づくりをすることで、幼児教育での経験が生きる学習になったり、より主体的な活動にするための環境を考えたりすることができた。また、学習内容を知ることで、幼児期での経験の重要性を再確認し、互いの教育への理解が深まった。
- 今後も多くの教員で共有し、授業・保育の改善につなげていきたい。

3 一人一人を大切に… 架け橋期の個の姿を追い、個や集団の変容へ

家庭的な面など気にかかる子どもの姿を、竹田小ブロックの共通の視点である「つながり」「主体性」「家庭との連携」の3点を中心に、架け橋期の2年間を通して、幼保が行ってきた個に応じた支援を共有し、小学校入学後の成長を追った。

(1) 個の変容と教師の関わり(事例から)

① A児の変容と教師の関わり

4月:入学してすぐのA児の姿より

好きな絵をかく学習。なかなか絵をかこうとしないA児。机にうつ伏している。10分ごとに声をかけても返事はない。30分後、教師が、「先生がかくし、色塗りする?」と聞くと、「うん」と応え、本児が好きな“バナナ”の絵を教師が画用紙にかき、A児が色を塗った。すると、それがうれしかったようで、2枚・3枚と画用紙に色を塗ることを楽しんだ。

小学校教員

かきたいけど、かけないA児の気持ちの受け止め

9月:エプロンを着たくないA児の姿より

給食エプロンを着るのを嫌がるA児。
理由も言わず、1学期が過ぎたが、ようやく「ガボガボするのが嫌」と言う。
9月のある日、他の教師に「エプロンを着ていないと給食室に入れない」と言われ、担任が、「どうする?言われちゃったなあ。そうなんだって」と、A児に問いかける。
A児「あと1回寝たら…」と、言う。教師「そう?あと1回寝たら、エプロン着ようね」と約束する。
次の日、A児はエプロンを着て、嬉しそうに給食当番をした。

自分で考えて決めることを大切に

小学校教員

2月:幼保小交流(にこにこタイム)でのA児の姿

国語チームになり、「大きなかぶ」のペープサートをする。担任が「あっ、かぶがない!Aさん、かぶしてみる?」とA児を誘う。「あー」と返事。表現しやすいかぶをつくり、それに割りばしをつけると、つくれたことを喜び、走って体でその喜びを表現していた。

A児の育ち

不安や自信のなさから、活動に取り組むことにネガティブになっていた姿があったが、A児の思いに寄り添うことで、次第に自分でできることは、自分でやりたいという思いがでてきた。

できるという自信

② B児の変容と教師の関わり

2学期:学校に行きたくないB児の姿より

2学期に入り、学校に行くことを嫌がる姿が見られるようになったB児。担任は、保護者と連絡を取り合い、毎朝、家まで誘いに行っていた。
担任との立ち話の中で、B児が登校しにくくなっていることを聞いた幼稚園の元担任。
B児の保護者と顔を合わせた時に、何気ない会話をしながら、保護者の気持ちに寄り添い、声をかけた。
しばらくすると、B児も学校に通えるようになった。後に、母親が「幼稚園の先生にも声をかけてもらえて、ホッとした」と話していた。

幼保小でともに育ちを見守る教師の関係

小学校教員

2月:幼保小交流(にこにこタイム)でのB児の姿

やる気満々なB児。チームも自分から決めて、休んでいた友達に「僕のチームに入って!」と誘いに行く。文字を読むことは苦手なので、教科書を大きくコピーしたものを渡すと、文字を追って一生懸命読んだり、年下の友達を張りきって案内したりしていた。

B児の育ち

学習面や友達との関わりの中で苦手なこともあるが、相手に「手伝って」と言えるようになると、本児の明るさや、周りの友達の助けもあり、自分の頑張りを認めてもらうことで、より意欲的になっていった。

友達からの認め

(2) 学級の児童の変容～新たな友達との出会いの中で、丁寧に安心感をつくる支援を～

入学当初の児童は新しい人間関係の中で、「僕はしているのに、なぜ…○君はしないの?」と、相手の行動をとがめるなど、自分のものさしで測る姿があった。「今日はそんな気分じゃないのかな?」「きっと、やりたいと思っていると思うよ」など、子どもの気持ちをクラス全体に伝えつつ、個々の子どもの姿を受け入れる姿勢で教員が関わっていくことで、次第に、友達のことを受け止めたり、それぞれの苦手なことを認め合えたり、優しく声をかけたり、クラス全体で温かく見守り、クラスが居心地のよい場所になっていった。また、一人一人の子どもの思いを受け止める教師の姿勢が、どの子にとってもクラスでの居心地がよくなり、自己を発揮できる基盤になると意識して、子どもたちに関わってきた。そうすることで、自ら考え主体的に学習に取り組む姿も増えてきている。

4 教職員の変容

幼保小の架け橋プログラムに取り組んでいく中で、子どもたちはもちろん、進めていく幼保小の各教員・保育者たちにも変容があった。

教師の存在・関わり

幼保は、やりたくなるような心が動く“環境づくり”を心がけていた。小学校も“やらなければいけない”ではなく、“やりたい”と思える授業を考えることが大切だと思った。

小学校教員

砂遊びで、幼保の先生が泥んこになって一緒に、思いきり遊んでいた。一緒に遊ぶ中で、子どもが自分でできたと思えるように、さりげなく援助していた。子どもと共に遊ぶからこそ、子どもたちは先生を身近に感じ、自分も一緒にやりたくなるのだと思う。

心が動く授業づくり

1年生は、できないから教えてあげなければと思っていたが、いろんなことを幼児期に経験して学んでいることを理解できた。もっと、子どもを信じて、関わっていきたい。

小学校教員

教師間の関係構築

進学に向けて、小学校は幼保と違うところがあるよと子どもたちに伝えがちだったが、子どもたちのことを一緒に考えてくれる存在として、送り出す側として、安心した。

幼保保育者

話し合いや交流をすることで、小学校の授業に対する思いや子どもへの願いなどを知り、子どもを育てる思いは同じだと嬉しく感じ、小学校の先生に、とても親しみを感じることができた。

幼保保育者

互いの教育への気づき

就学前施設の子どもたちが、何かをつくりたいと思った時に、自分たちでやり始める姿に驚いた。主体的に動けるようにわかりやすい環境の必要性を感じた。自分の教室は、「子どもたちにとってわかりやすいのか」という視点で見直したいと思った。

小学校教員

授業の内容や単元の流れを知ることで、改めて、幼児期に大事にしなければいけないことを感じることができた。当たり前にしている遊びの意味を、育ちをつなぐ視点で見つめ直し、幼児教育の質を高めていきたい。

教室の環境や、教師の関わりを見直してみよう!

小学校教員

教室の環境を見直す

- ものの場所を固定
- わかりやすく掲示
- 自分で動ける環境

教師の関わりを見直す

- けんかをすぐに仲裁せず、子どもたちの思いを出す・折り合いをつける経験を大切に。
- 1回で成功できるようにでなく、試行錯誤できる経験を。
- 指示待ちではなく、「こうしたい」と思える活動に。

5 にこにこルーム開設に向けて

小学校教員の意識の中に「子どもがやりたいこと」というより、「子どもに指導しなければならないこと」と捉えて進めていく傾向にあった。特に入学当初は、「教室に入り、自分の席に座って学習・活動をする」という点について、早く定着させたいと焦りがちになっていた。幼保小の架け橋プログラムに取り組み、子どもたちにとって、小学校が安心できる場になり、学校生活をスムーズに過ごせるようになるためには、机やいすでなく、幼保のような環境で過ごせる場が必要だと感じ、新たに『にこにこルーム』という教室を1年生の教室の隣に設けた。『にこにこルーム』には、幼保で使用していたであろうおもちゃや絵本を置いたり、友達や先生と近い距離で活動が進められるように畳を敷き詰めたりと、幼保の要素を取り入れた環境を意識した教室となるようにした。

環境の工夫

- 畳を敷き詰めて座って遊べるようにする。
- 友達とつながれるようなおもちゃを準備
- 幼保で遊んでいたような環境にする。

幼保の先生と一緒に環境を準備

一人で遊べるパズルや折り紙、塗り絵の他に、カプラやドミノのような、友達と一緒に遊べるおもちゃも、準備しましょう。

座卓で向かい合って活動することで、友達とつながれるかもしれないですね。

『にこにこルーム』の現状と課題

- 不安で教室に入りにくかったり、席に座って活動しにくかったりする子どもにとって、学校生活に慣れる場になった。
- 畳が敷いてあることで、友達と触れ合ったり、寝転んだりでき、友達とのつながりを深めやすいと同時に、入学当初の休み時間にのびのびと遊ぶことができた。
- 居心地がよくなり、教室に戻るのを嫌がったり、遊びがやめられなかったりする姿があるので、環境の出し方など工夫する。

架け橋コーナーでは、幼保小の連携・接続の取組を保護者・教職員に知らせている。

6 成果と課題

子ども同士の交流活動だけにとどまらず、教員・保育者間での交流を深めることで、少しずつ教員の意識に変化が見られてきた。保育や授業を見合い、研究協議することで、子どもの育ちのつながりや、子どもの捉え方、関わり方、互いの教育について知ることができ、交流から教育の接続へと進められたことが大きな成果である。保護者からは、架け橋コーナーの掲示物を見たり、担任からの幼保小の架け橋プログラムの話を聞いたりする中で、「今後も続けてほしい」「入学が心配だったが、安心した」「にこにこルームが、子どもにとって安心できる場所になっている。より連携が深まってほしい」という声をいただいている。架け橋期に携わる教員だけでなく、全教員が学ぶ校内体制により、教師一人一人が自分事として捉え、学びがつながっていることを意識するようになってきている。今後も、互いの教育・保育の質の向上につながるように、持続可能な交流や研修の在り方について考え、発信していきたい。

架け橋期のカリキュラム（竹田小ブロック・5歳児）　期待する子ども像「夢に向かい、つながりの中で主体的に生きていこうとする子」

竹田小ブロック

共通の視点			4・5月	6・7・8月	9・10月	11・12月	1・2・3月
望ましい発達の姿			安心・安定感	自信・充実	自己発揮・協同		協同・期待
			・新しい環境に慣れ、安心・安定感をもって生活する。	・身近な環境に関わり、試したり考えたりして遊ぶ。	・友達関係を深めながら、自分の力を十分に発揮して遊び、生活する。	・友達と共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりする。	・学級全体の課題に取り組み、やり遂げた充実感を味わい、就学への期待をもち、成長を感じる。 ・生活に見通しをもち、自分たちで生活を展開する。
園・所で展開される活動			・生活の場づくり（ロッカー・靴箱など）言・社 ・春の自然に触れる（虫探し・草花摘み）自然 ・砂や泥、色水遊びなど素材に触れて遊ぶ 思・感 ・興味をもち考えたり試したりする（ツマグロヒョウモンの幼虫などの飼育・一人一鉢栽培）自然・数 ・プール 健 ・ルールのある運動的な遊び（しっぽとり・帽子取り等）健・道・数 ・ごっこ遊び 言・協 ・当番活動（飼育・給食の配膳・昼食時の挨拶）自然・言・社		・体を動かす遊び、ルールのある遊び 健・道・言・数・自立 ・栽培物の収穫と調理、パーティー、お店屋ごっこなど 自然・協・数・言・社 ・共同制作、絵画、制作活動等・歌や仲良し遊び、楽器遊びなど 感・クッキング（ご飯・味噌汁）健 ・秋の自然を取り入れて遊ぶ 自然・思 ・マラソン 健・数 ・お茶会体験（幼）社・感 ・生活発表会（保）劇遊び・和太鼓 協・感・言・感		・正月の遊び 数・思・道・自 ・生活発表会（幼）協・感・言 ・修了に向けての活動 感・社（お別れ遠足・記念製作等） ・小学生との交流 社 ・当番活動の引継ぎ 社・協
安心・安定感を育む	つながり	幼児	・年長児になったことを喜び、いろいろな友達や先生と関わって遊ぶ楽しさを感じる。 ・新しい保育室に慣れる。 ・友達とイメージを膨らませて遊ぶ。	・友達と考えを出し合い、相手の思いを分かろうとし、遊びを進めようとする。 ・友達とイメージを広げながら遊んだり、年下の友達と関わったりすることを楽しむ。 ・自然物と関わり、考えたり、試したりして遊ぶ。	・共通の目的に向かって、一人一人が力を出し、達成する喜びを感じる。 ・いろいろな素材や遊具を工夫して使い、友達と一緒に遊びに使うものをつくったり、かいたりすることを楽しんだり、歌や楽器遊びなどの表現活動を楽しむ。 ・運動会の遊びやお店屋さんなどのごっこ遊びを異年齢で楽しむ。 ・年下の友達など相手の立場に立って言葉をかけて関わろうとする。		・友達と共通のイメージをもち、相談しながら遊びに必要な場を構成したり、必要なものをつくったりする。 ・遊びや生活を振り返り、自分の成長を感じ、さまざまな人への感謝の気持ちをもつ。 ・小学生とにこにこタイムで交流し、就学に期待する。
		援助	・教師もともに遊び、一人一人の思いを受け止め信頼関係をつくる。一人一人の安定する場所をつくるとともに子ども同士をつないでいく。	・グループやクラスで話し合う機会をもち、教師が橋渡しをしながら、互いの思いや考えを出し合えるようにする。互いに認め合える関係づくり。	・仲間がいるからこその遊びの楽しさを感じたり、気付いたりできるような言葉をかけて関わる。 ・共通の目的に向かって遊びを進める充実感が味わえるように、友達と考えや思いを出し合う姿を認める。		・一人一人の姿を認め、自分の力を発揮できるように励ます。 ・自分もクラスの仲間であることの喜びを感じたり、友達の良さを認めたりしながら、力を合わせて取り組もうとする姿を認める。
		環境	・新しい保育室に慣れ、自分たちで生活の場を整える気持ちがもてるようにする。 ・安定する場所、遊びの拠点となる場所の環境を工夫し、友達とのつながりを感じられるようにする。	・遊びの振り返りでは、ICT機器や写真を活用し、視覚的にイメージが共有できるようにする。	・見通しや期待をもって活動に取り組めるように、視覚的に分かりやすい環境を工夫したり、図を見て話し合ったりする。 ・友達がつくったりかいたりしたものを見て、よさに気付き認め合う時間をもつ。		・幼保小が互いの様子が分かるようにDVDを活用した交流の機会を設定する。
	主体性	幼児	・様々な素材や材料に親しみ、心を開放させて遊ぶ。 ・グループの友達と相談する機会をもち、動物当番や昼食時の当番をする。	・友達と共通のめあてをもって遊びを進めていく楽しさを感じる。 ・ごっこ遊びでは役になりきって、自分で言葉を考えて友達とやりとりをする。	・みんなで考えた遊びや生活のルールを、必要感を感じて守ろうとする。 ・友達と力を合わせる遊び、勝ち負けのある遊びを通して、自分と向き合い葛藤したり、友達と達成感を味わったりする。さまざまな運動遊びに興味をもち意欲的に取り組む。 ・ごっこ遊びなどの取組で、数字・文字・標識などに関心をもち、活動に取り入れる。		・自分の役割を自覚し行動し、役割を果たす喜びを感じる。 ・絵本やお話を聞いてイメージを膨らませ、登場人物になりきって表現したり、気持ちを考えてセリフを言ったりして、友達や先生と劇遊びを楽しむ。
		援助	・年長児になった喜びに共感し、自ら活動しようとする意欲を受け止める。 ・遊びの継続性を大事にするため、グループで時差をつけて給食を食べる。（保）	・意欲を受け止め、めあてがもてるように提案したり、試したり工夫したりできる場と時間を、時には他学級の担任と連携し確保する。	・一人一人がめあてをもち、意欲的に取り組んでやり遂げるよう、自ら考え、動く姿を見守り必要な時を見極めて援助する。 ・自信がもてるように認め励ます。		・友達と意見がぶつかったときは、納得して折り合うことができるように、子ども同士で解決する姿を見守る。
		環境	・見通しをもって生活できるように、絵カードを用い、一日の流れを分かりやすく知らせる。 ・友達と関わりが生まれる場所や遊具を選ぶ。	・身近な自然物や生き物と触れ合う機会を多くし、子どもが興味をもったものや疑問に感じたことを追求したり、継続して成長を見たりすることができるようにする。	・戸外や小学校運動場で思い切り体を動かす機会を設ける。 ・季節の行事や自然に親しめるように、自然物や子どもの作品を飾ったりする。 ・保育室の椅子を「5」ずつ置いたりチケットを数えたりするなど、生活の中で「5」の概念や「1対1対応」を意識できるようにする。		・園行事など予定をカレンダーに書いたり「あと何日」と数えたりして、主体的・意欲的に生活できるようにする。
支援・連携	家庭		・登降園・所時に家庭での様子を聞いたり、園での様子を伝えたりして、保護者との信頼関係をつくる。日々の子どもの姿や活動のねらいをホームページや園だよりなどで伝え、ともに成長を喜ぶ。 ・個人懇談で家庭の背景を知り、保護者が必要な支援を知る。 ・活動のねらいや子どもの様子、連絡事項を個別に、また具体的に知らせる。 ・学級懇談会で園の教育方針や学級経営について伝える。 ・展示食とレシピを展示し、家庭でもいろいろな食材に触れられるようにする。 ・就学支援シート説明会を行い、保護者が安心して進学について考えられるようにする。 ・弁当箱をクロスに包む。 ・嫌いなものも少しは食べようとする。 ・お手伝い活動（調理、布団敷き）をする。		・運動会や生活発表会など保護者が参観する行事では取組の様子やねらい、過程での育ちを伝える。 ・給食のメニューを通して、親子クッキングをしてかかわりを楽しみ、食材を知ったりする。（保育所では炊飯と味噌汁づくり） ・気温に合わせて、自分で服装の調整をする。 ・薄着で過ごす。 ・暑い時はシャワーを浴びたり汗を拭いたりする。		・学級懇談会で子どもたちの成長の姿を伝え、保護者が安心して就学準備をできるようにする。 ・生活習慣の自立について保護者と確認し、小学校生活での戸惑いを少なくできるよう、家庭での対応の仕方など保護者と連携する。
	幼保小		・入学当初の授業参観に参加し、1年生の様子を知る。 ・授業参観や保育参観を行い、それぞれの教育について知る。 ・幼保で顔合わせを行い、新しい友達を知る。 ・砂場の交流では事前にねらいと環境について共有する。交流しながら迷いがあれば、確認し合う。	・学校で交流したり、運動場で走ったりして、学校に親しみをもつ。	・小学校の行事に参加し、ともに活動し、いろいろな友達や先生と関わることを楽しんだり、幼保小の一体感を感じたりする。 ・運動会後の交流保育では事前にねらいと環境、司会担当など進め方について話し合う。事後に育ちや改善点について出し合い次年度につなげる。		・小学校のにこにこタイムに参加し、新しい友達や生活の仕方を知ったりして、学校生活に期待をもつ。
個への支援			・学級全体の活動では、全員そろってから、全体への話を担任から聞き、その後個別にその内容を伝える。	・ごっこ遊びなど参加しにくい子どもには、役割や言葉などをはっきりさせて、加配教員と連携して参加しやすい援助をする。	・遊びのルールを理解できにくい子どもには、図を用いるなど視覚的に説明したり、その場で伝えたりする。 ・劇遊びでは参加しにくい子どもが参加しやすい場面を作り、ストーリーを子どもと考え創作する。		・就学への不安感をもつ子どもには、遊びや生活で自信をもっている場面を見つけ認め、自分の良さに気づくことができるように関わる。DVD視聴で学校生活の様子を知り、学級全員で期待感が共有できるようにする。

＊「園・所で展開される活動」内に幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を略して入れている。健：健康な心と体 自立：自立心 協：協同性 道：道徳性・規範意識の芽生え 社：社会生活との関わり 思：思考力の芽生え 自然：自然との関わり・生命尊重 数：数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 言：言葉による伝え合い 感：豊かな感性と表現　「支援・連携」の「家庭」の四角の枠は家庭と連携して身につけたい生活習慣、経験。「幼保小」の四角の枠は経験させたい内容

架け橋のカリキュラム（竹田小ブロック・1年生）期待する子ども像「夢に向かい、つながりの中で主体的に生きていこうとする子」

竹田小ブロック

共通の視点			4月	5月	6月	7・8月	9月	10月	11月	12月	1・2月	3月
望ましい発達の姿			安心・安定感		安心・安定感・仲間づくり・達成感		自立・充実・協力		自立・充実・協力		協同・自信・期待	
			・新しい環境に慣れ、安心・安定感をもって生活する。		・身近な環境と関わり楽しく安心して遊んだり生活したりする。		・身近な環境や教材と関わりを深め、気持ちの自己調整をしながら、学校生活を送る。		・クラスや学年共通の目的に向けて学習・活動に協力しながら取り組む。		・自分たちの生活や学習を振り返り、さらに成長するために意欲的に活動する。	
小学校の生活科を中心とした各教科等の単元名や活動			・学校生活の仕方を知る。 ・学校生活・集団生活のルールやマナーを知る。	・いちねんせいがはじまるよ ・なかよしいっぱいがっこうたんけん ・一年生を迎える会	・学校生活の仕方に慣れる。 ・さいてほしいなわたしのはな	・なつとともだち ・水遊び ・わくわくプラン	・生活調べ ・わくわくプラン ・いきものとなかよし	・体育発表会 ・あきとともだち	・1・2年合同校外学習 ・音楽発表会	・みんなのにこにこ大さくせん ・キズナ作文	・ふゆとともだち ・もうすぐみんな2年生 ・TAKEDAフレンドフォーラム	・にこにこタイム
安心・安定感を育む	つながり	児童	・友達にあいさつしたり自己紹介をしたりし、お互いに興味を持つ。 ・幼稚園や保育所で経験した遊びを一緒に楽しむ。		・気の合う友達と仲良く遊ぶ。 ・クラスの友だちと一緒に学習し、ペアやグループで達成感や喜びを共有する。 ・クイズを出し合ったりインタビューしたり、一方的ではない交流を楽しむ。		・学年の友達と仲良く学習したり遊んだりする。 ・相手意識をもって学習・活動に取り組む。 ・友達のいいところをみつける。		・上級生と仲良く遊んだり学習の交流をしたりする。 ・クラスや学年の友達と達成感や喜びを共有する。 ・家族や家庭における自分について考える。		・友達同士でこの1年間を振り返り、自分や友達の成長に気付き、進級への期待を高める。 ・友達と協力してにこにこタイムの活動を考え、準備する。	
		支援	・家庭や幼稚園・保育所での様子を知り、遊びや会話を通して信頼関係を築く。 ・笑顔でゆっくりと肯定的な言葉で話し、あたたかい関わり方を心がける。 ・にこにこルームで、安心して遊んだり楽しく歌ったりする中で、教職員や友達とつながりをもてるようにする 。		・担任以外の教職員もあたたかく積極的に関わり信頼関係を築く。 ・子ども同士をつなぐ支援を行う。 ・集団で遊んだり学習したりする楽しさを感じられるようにする。		・相手意識がもてるような声かけをする。 ・児童のいいところを積極的に取り上げ、褒め、広めるようにする。 ・クラスや学年などの他とのつながりを大切にできるよう集団の高まりやいいところを積極的に取り上げ、褒める。		・お手本にしてほしい上級生の言動に注目させる。 ・家庭生活に関わる活動を設定する。 ・学校外の人たちとの関わりにも目を向け、公共のルールやマナーを意識できるようにする。		・自分自身や友達の成長が実感できるような活動を設定する。 ・自信をもち、進級への期待が高まるように、新1年生の存在に気付けるようにする。	
		環境	・学校教育目標や学級目標を伝える。 ・幼稚園や保育所での経験を生かした学習や遊びの場を設定する。 ・全面畳敷きのにこにこルームを1年教室の隣に設定し、遊具や絵本等を置き、安心して遊べる環境を作る。		・学習の中に共同学習・ペア学習の場を設定する。		・見つけた友達のいいところを広げられるような場を設定する。 ・学習や活動のめあて・振り返りを提示する。 ・学習・活動の振り返りを掲示し共有する。		・他とのつながりが感じられるような写真や絵を掲示する。		・友達の頑張っていることが伝わるように、子どもの成果物を掲示しておく。	
	主体性	児童	・幼稚園や保育所での経験を生かし、生活・学習を進める。 ・担任に自分の思いを伝える。		・自分の読みたい本を探し、読書を進める。 ・ペアで自分の思いを伝え合う。 ・色を塗るなどの簡単な形で学習・活動の振り返りをする。		・健康的な生活を意識する。 ・グループで自分の思いを伝え合う。		・上級生に自分の思いや考えを伝えながら学習を進める。 ・ペアやグループでの活動を楽しみ、クラスや友達のためにできることを考える。		・これまでの学習経験を生かし、自分の思いや考えを表現しつつ、比較をしたり、違いを感じたりしながら学習を進める。	
		支援	・児童の特性を知り、児童の意欲が高まるように配慮する。 ・児童の実態に合わせて、柔軟に時間割を組む。 ・ストーリー性をもたせるなどの工夫をすることでスムーズに取り組めるようにする。		・生活や学習の中に自分で選択する場を設定する。 ・子どもの意識や思いの流れを大切にした授業を構成する。 ・できるようになったことを実感できるような声かけやしくみを意識して行う。		・早寝・早起き・あさごはんなどの健康的な生活の重要さを伝える。 ・自分一人でも進められるような学習・活動方法を取り入れる。		・上級生は優しく頼りになる存在であることを伝える。 ・ペアやグループでの活動など友達と関わりながら学ぶ機会を多く取り入れる。 ・運動会や音楽発表会の行事を通して達成感がもてるようにする。		・もうすぐ2年生に進級することや新1年生のよき見本となってほしいことを伝える。 ・入学からこれまで上級生や周囲の大人が支えてくれていたことに気付けるようにする。	
		環境	・絵や写真などの視覚的な指示を使って安心感をもてるような場を設定する。 ・一日の生活や学習の基本的な流れを確立する。 ・約束や進め方などは伝え、共有した後に自分で確認できるように掲示等の工夫を行う。		・学習・活動に関連する並行読書を用意する。 ・主体性を高め合える・刺激し合えるような学習形態にする。 ・自分の〇〇という思いで意欲的にかかわったり扱ったりできるよう、個別の場所・物を用意する。		・学習や活動にめあてをもって取り組む。 ・学習・活動後に感じたことを言葉で記録する。 ・いろいろな物に興味・関心が持てるように可能な限り多種類の教材等を用意する。 ・児童自身で学習・活動できるように動画教材等を準備する。		・意欲が高まるような教材を作成したり、幼稚園から借りたりして用意する。 ・係活動や当番活動について話し合う機会を増やす。		・これまでの学習の足跡がわかる学習カード等をすぐに見ることができるようにしておく。	
	支援・連携	家庭	・見通しをもってもらえるように、前もって学習や活動についての連絡をしておく。 ・児童の情報を家庭から得たり、学校は子どものよいところを知っていることを発信したりする。 ・保護者に連絡や伝えたいことがある場合は、積極的に家庭訪問する。		・家庭学習や読書等、家庭にも協力して取り組んでもらえるように学級便信等で働きかける。 ・個人懇談会で子どものよいところや頑張り等を伝え、今後につなげるようにする。		・生活リズムを把握し、健康的な生活を意識してもらう。 ・授業参観で子どもやクラスの様子を知ってもらい、共に健やかな成長を考え見守ってもらえるようにする。		・個人懇談会でよさや頑張り、課題を共有する。 ・子どもがお家の人のために立てたにこにこ大作戦を温かく見守ったり、コメントしたりして家庭でのつながりを深めてもらえるようにする。		・半日入学・入学説明会で、新入学予定児童が期待と安心感をもって入学できるように工夫する。 ・子どもたちの成長が伝わる授業参観・懇談会を設定し、2年生への見通しを持てるようにする。	
		幼保小	・幼保小連絡会で新入学児童の情報を交流する。 ・幼保の教員・保育者の顔合わせをする。 ・5歳児の担任だった幼保の先生等に授業参観してもらい、1年生の様子を知ってもらう。 ・にこにこタイム「砂場交流」を実施し、幼保小の子ども同士が交流する。		・幼稚園参観や保育所参観で、保育や園児の様子を知るとともに、園児に小学校教員の顔を知ってもらう。 ・幼保小連絡会で情報交換を行う。 ・にこにこタイム「水遊び」を実施し、幼保小の子ども同士が交流する。		・幼保小連絡会で情報交換を行う。 ・幼稚園・保育所の運動会を小学校の校長や教員が見学する。 ・ミニ運動会（幼保小）を実施し、子ども同士が交流する。		・にこにこタイム「秋見つけ」を実施し、幼保小の子ども同士が交流する。 ・ぐんぐん広場（幼保）を実施し、交流する。 ・小学校の音楽発表会へ幼稚園・保育所の園児を招待する。		・新入学予定児童や家庭の情報を得る。 ・幼稚園や保育所で経験していることについて知り、次年度の計画を立てる。 ・授業参観にて子どもの1年間の成長を知ってもらう。 ・にこにこタイムで、入学予定の児童に、小学校を紹介する発表会を実施する。	
	個への支援		・一人一人の思いや背景、内面をしっかりと見つめ、その不安や繊弱感を理解し、様々な子どもの姿を受け入れる。 ・困っている児童の家庭に連絡・相談し、次につなげる。 ・困りが予想される家庭に前もって連絡をし、家庭での協力を得る。		・疑問や不安の出し方を伝える。 ・できていないことや困っていることがあっても「〇〇さんがいるだけで、学校に来てくれるだけで花丸！」ということを伝える。 ・自分の姿を振り返り、次につなげる。困った時は困ったと自分で言えるようにする。		・生活の乱れから遅刻しがちな児童等の家庭へは、生活調べの取組前後に連絡をし、意識的に進めてもらうようにする 。		・進んで取り組んでいる姿を言葉で伝え、達成感を高められるようにする。		・成長した姿を喜び、共有し、次年度への期待感を高められるようにする。	

幼児期の学びの芽生え

体を動かして遊ぶ楽しさを味わう姿を通して

3歳児　6月

ねらい　イメージをもって遊ぶ中で、体を動かす遊びを取り入れ、より遊びが楽しくなったり、体を動かす心地よさを感じたりする。

発達・教師の援助 環境構成のポイント　主体的に身近な環境に関わり、繰り返し体を動かすことを楽しむという3歳児の発達を捉え、イメージをもって何かになりきり、体を動かして遊ぶことで、様々な動きが引き出されるような環境を整える。

実践内容　海にジャンプ！（3歳児）　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

保育室にある大型積み木で子どもたちが船をつくった。船をきっかけに海のイメージが沸いてきて、船に乗って冒険をしたり、画用紙でつくった望遠鏡で遠くのサメを探したり、島に渡る橋を渡ったりするようになった。

船に乗って出発

豊かな感性と表現

引き出される体の動き
船の上を歩く、別の積み木に跳び移る、登る
教師の意図や願い
もっとダイナミックに体を動かして遊んでほしい！

海のイメージがしやすい青いマットを敷いて遊びの環境を再構成

「じゃあ橋の上から海に飛び込んでみる？」と、海のイメージの青色のマットを敷いた。

ちょっと怖いけど、そーっと跳んで…。

自立心

健康な心と体

マットがあると安心！やった！跳べた！

新たな環境（マット）により、新たな動き（ジャンプ）が引き出された。

バッシャーン！ブクブクブク…。

思考力の芽生え

協同性

（保育者）手を挙げて、かっこいいポーズだね！

海に見立てて泳ぐなどの新しい動き腹ばいになる・両手を動かす・足を動かすなど

教師の認めの援助により新しい動きが引き出され次々と子ども同士が真似て伝わっていく

ジャンプを繰り返して動きが洗練

様々な跳び方でバリエーションが増えていった。

保育を振り返って　**1年生につながるもの：体を動かす意欲、心地よさ、様々な体の動きと仲間の存在**

船や海というイメージをもって遊ぶことで、楽しみながら体を動かして遊ぶことにつながった。また、マットという新たな環境により、安心して繰り返して跳び、体を動かす楽しさを感じていた。さらに、様々な体の動きを教師が認め、その動きを別の子どもが真似することで、動きのバリエーションが増えていった。
幼児期はイメージをもって、なりきって遊ぶことが思わず体を動かしたくなる原動力となる。4歳児、5歳児と発達するにつれ、心を動かす意欲の源に難しいことへの挑戦やチームの競い合いなども加わり、体を動かす遊びが多様になる。体の動きのバリエーションが豊富になり、動きが洗練されていく。幼児期は「心が動き、体が動いて成長する」発達の時期である。

幼児期の学びの芽生え

気の合う友達と一緒に身近な生き物との出会いを通して

4歳児　5月

ねらい　安心して、気の合う友達と一緒に生き物と触れ合いながら、命があることに気付き、大切に飼育しようとする。

発達・教師の援助 環境構成のポイント

- 先生や気の合う友達と関心のある遊びに主体的に取り組む4歳児の発達を捉える。
- 生き物（ダンゴムシ）と出会い、愛着をもって関わり、共に楽しみ、慈しむことができる環境を整える。

実践内容

ここにいるかな

見て!見て!見つけたよ

自然との関わり・生命尊重

虫を見つけたいな

見つけた虫を虫かごに入れて、テラスや保育室に置く姿を見守る。しかし、数日したら動かなくなってしまうことが多かったが、子どもたちに気にする様子が見られなかった。生き物の命の大切さに気付いてほしいなと声をかける。

環境構成や援助のポイント

虫に興味をもつ子どもたちが思い思いに遊び出せるように虫かごを手に取りやすいテラスに多めに出す。そして見つけた虫を友達と一緒に見合えるように、置き場所を設定する。

見つけた虫を置いておきたい

ご飯がなかったからかも

(教師)なんで動かないんだろう?

(教師)Hくんはお家つくってたんやね。

(教師)どんなお家がいいか調べてみよっか

思考力の芽生え

言葉による伝え合い

お家作ったらいいと思う

Hは葉っぱも土もいれてた

いつでも見られるよう、図鑑をダンゴムシの家の近くに置く。子どもたちと一緒に図鑑でダンゴムシの飼い方のページを見る。見てわかりにくい箇所は言葉で補って気付けるようにする。

ダンゴムシの家をつくりたい

協同性

四角いのがある!ウンチだ!

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

みんなで楽しめるようにダンゴムシを入れられる虫かごより大きめの丸型透明容器を出す。

子どもたちは丸型透明容器に土や石、葉を入れて作った家にダンゴムシを移す。

言葉による伝え合い

段ボールも好きなんやって

自然との関わり・生命尊重

保育を振り返って　1年生につながるもの:栽培・飼育で感じる命、生き物への愛着心、不思議さ、尊さ

幼保では、子どもたちが花や野菜を育てたり、様々な生き物を育てたりなど、動植物に十分に関われる環境や時間を設定し、動植物の生態や不思議さ、生命の大切さや温かさ、畏敬の念などが育まれることを大切にしている。この事例では、十分な量の虫かごやそれを置く場所があったことで、虫が好きな子どもたちが三々五々集まってダンゴムシをたくさん見つけたい、置いておきたいという願いが達成された。しかし、動かなくなったことを命に気付く機会として、教師が図鑑で調べる手立てを提案し、子どもの思いを受け止め、仲間で考えを伝え合い、大事に飼育する姿につながった。

幼児期の学びの芽生え

「思いを込めてクジャクをえがく」～心を動かす手立ては丁寧に～

―絵画表現ができる環境（素材や用具の種類・量）を整え、子どもの表現は思いのままに―

5歳児　11月

ねらい　クジャク博士の話や動物園でクジャクを見た経験から、心を動かし、思いを込めてクジャクをえがく

発達・教師の援助 環境構成のポイント

- 京都市動物園に下見に出かけ、5歳児担任はクジャクと出会い、クジャクの面白さと魅力を感じ、子どもたちがより興味をもつようにクジャクの魅力を伝えた。
- クジャクへの興味・関心がもてるように、園外保育当日に、クジャク博士（動物園の講師）にクジャクについての話や、子どもたちの質問に答えていただくことをお願いした。

実践内容

社会生活との関わり

<園外保育当日>

雄のクジャクの羽ってきれいだね

雌は卵を産むんだ!

クジャク博士からお話を聞いたよ

羽はキラキラしてるね!

自然との関わり・生命尊重

後日、クジャク博士から手紙が届く

クジャク博士は「どうして雄のクジャクだけ羽が綺麗なのか?」という子どもの質問に「答えた内容が、子どもたちの心に届いていないのかも…」と感じ、後日、子どもたちにわかりやすい内容で、質問に対する答えを新たに手紙で送ってくださった。その内容は「もしも雌の羽が雄のように派手だったら、卵を温めている時にすぐに敵に見つかってしまい、卵を狙われてしまう。だから雌は地味な羽で卵を温めている。そして、雄は敵が現れた時には、あのかっこいい羽をバッと広げて、敵から雌クジャクと卵を守るんだよ」ということだった。この話が子どもたちの心に響いた様子だったので、その思いを絵画で表現する活動につなげた。

<思いを込めてクジャクをえがく>　～夢中、没頭、思いのままに自らと対話する子どもの姿

自立心

色々な道具（絵具、コンテ、大小様々な筆、割りばし、色々な形や大きさの型押し、棒、ローラー、スポンジ等）を主体的に自分で選んで、絵の具でかくよ!

思考力の芽生え

雄のクジャクの羽は目玉模様がいっぱいついていてかっこいいんだ!そして、敵から雌クジャクと卵を守るんだ!

豊かな感性と表現

ぼくは、手に絵の具を付けてフワフワの羽をかいてみたい!

保育を振り返って　1年生につながるもの：心が動く豊かな感性、生き物への愛着心、自由な表現

クジャク博士から届いた手紙が子どもたちの心に響いたからこそ、「卵と雌クジャクを敵から守る、かっこいい雄のクジャクをかきたい!」という思いを込めて、絵具やコンテ、色々な道具や筆、手などを使って自分なりの方法で自由に表現する姿が見られた。子どもたちの心が動くことで、その思いを子どもたちなりに自由に表現する大切さを教師自身も学ぶことができた。その根底には、日頃から、細心の注意を込めて、子どもたちが「主体的・意欲的」に活動できる場の設定、素材や材料、用具の豊富さや使いやすさを考慮した環境構成が大切であることを改めて実感した。

幼児期の学びの芽生え

氷に興味や関心をもって関わり、考えたり試したりする姿

5歳児　12月

ねらい

- 冬の自然に興味や関心をもち、遊びや生活に取り入れて楽しむ。
- 思いや考えを伝え合い、友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。

発達・教師の援助 環境構成のポイント

- ビオトープに氷が張ることを楽しみに待ち、その機を逃さず、遊びに取り入れる。
- 嬉々として遊ぶ子どもの姿を見て、冬の自然現象で十分に遊べる時間を柔軟につくる。

実践内容

ようやくビオトープに氷が張った。それを見つけた子どもたちは、氷を手で持ってみたり、叩いてみたり、氷の冷たさや固さに触れることを楽しんでいた。2学期の最終日で大掃除のために遊びを中断しなければならなかったが、後で遊べるように氷を残しておきたいと考えた子どもたちは容器に氷を集め、テラスまで運んできた。その時に、A児とB児が“どうしたら氷がそのままとけずに残せるか”その方法を巡って話し合っていた。

自然との関わり・生命尊重

継続して遊びたい気持ちを受け止めたいな。考えの違う2人が伝え合っている姿を見守りたいな。

保育者

A児

水は冷たいのだから水に入れておいたら氷はとけない

水の中に氷を入れたら、氷はとけないと思う

言葉による伝え合い

氷は寒いから水が固まってできてるんだよ。だから何も入れないで置いておく方がいいよ

B児

氷よりも温かい水の中に入れたらとける。だから何も入れない方がいい

だったら、水が固まっているということは、水が氷になっているから、水をこの中にいっぱい入れておいたら大丈夫なんちゃうん

思考力の芽生え

大丈夫じゃない。水を入れすぎてもそれがだんだんとけていくから、たぶん今日もあったかくなるから、今日の間にたぶんとけてると思うよ

協同性

熱いものを入れたらとけるけど…

水でもとけると思うよ

だったら、どうやってとけやすくないようにするの

自分の言葉で粘り強く伝えようとしているな。お互いの言葉を聞き合っている姿もあり、二人の良い関係性が感じられる。

うん、実験!

どうしたらよいか困っているな。こちらから提案してみよう。

保育者

実験、実験♪

それなら1回試してみようか

クラスみんなに二人の実験のことを伝えて、結果を楽しみにしよう。

B児案:氷 だけ

A児案:水の中に氷

結果は、水の中の氷はなくなっており、氷だけの容器には氷が残っていた。喜ぶB児の傍らでA児は何も言わず、その様子を見ていたが、周りの子どもたちがいなくなったところで、私のところへ来て、小さな声で「水、入れてた方がとけてたな…」と言った。私は「やってみてよかったね」と、肩を抱き、一緒に保育室に戻った。

豊かな感性と表現

保育者

いつもなら涙を流すA児が、結果を受け止め、精一杯我慢している。A児の気持ちを考えて、クラスで結果を共有するのはやめておこう。

保育を振り返って　1年生につながるもの：好奇心、探究心、思考力の芽生え、安心を土台にした対話

子どもたちは、身近な自然と触れ合う体験を重ねながら自然への気づきや親しみを深めていく。5歳児のこの時期には、さらに好奇心や探究心をもって関わり、自分の考えたことを表現しながら、身近な事象への関心を高めていく。自分の考えを粘り強く伝えられるのは、考えは違っても相手に聞いてもらえているという安心感と二人の関係性が築かれていたからだ。自分たちのことを理解してくれる教師が傍にいるという安心感もあっただろう。そのような安心できる関係の中でこそ、自分の思いや考えを自信をもって互いに伝え合う姿につながっていく。

幼児期の学びの芽生え　多様性を受け入れ仲間とルールを考えて遊ぶ姿から

5歳児　1月

ねらい　クラスの仲間と思いを伝え合い、解決策を見出し、遊びを進めることを楽しむ

発達・教師の援助 環境構成のポイント

・クラスの仲間と主体的にしっぽ取りを進める姿を見守る。
・自閉症スペクトラムのA児とともに遊びを続けるためのルールを自分たちで作りだそうとしている姿を見守りながら援助するタイミングを図る。
・思いを出し合い、話し合い、様々な葛藤を乗り越えても仲間との遊びの継続をしようとする子どもたちを認める。

実践内容　終われないしっぽ取り　～A児と一緒に遊び、勝敗を決めるためには?～

以前の対戦でしっぽを取られたことが嫌だったA児は、しっぽをつけずに走り回り、仲間と一緒に遊びに参加することを楽しんでいる。A児が嬉しそうにしっぽを取りに行くのは、同じ赤チームの大好きなB児だけなので、あまり赤チームには貢献していないのだが、みんなと同じ場で一緒に走っているA児のことを、みんなはチームの仲間だと思い、一緒に遊べることを楽しんでいる。

健康な心と体

1回戦、青チームは強い。一人残った赤チームのC児、最後まで頑張ったが、しっぽを取られてしまった。でも、A児はしっぽをつけずに走っているので、まだ残っている。それに気づいた青チームのみんなが赤チームに相談に行った。

教師は、こうして、何とかA児も一緒に遊ぼうとする子どもたちの気持ちが嬉しく、もう一度A児に「A君、しっぽつける?」と確かめに行った。でもやっぱり、「しっぽはつけない」と言うので、A児にみんなが考えた「A君にはタッチする」「4回タッチされたらA君は陣地に戻る」というルールを説明し、A児の同意のもと2回戦が始まった。

自立心　道徳性・規範意識の芽生え

保育を振り返って　1年生につながるもの:多様性を認める、葛藤経験、伝え合う、折り合う気持ちの調整力、規範意識、粘り強さ

仲間の赤チームも相手の青チームも誰もA児を疎外することなく、責めることなく、A児なりの参加の仕方を認めつつ、どうしたら勝敗がつけられるかという事をみんなで決めて遊ぼうとする姿を見て、嬉しくなった。
入園当初は保育室の中に入ったり、クラスの友達と一緒に遊んだりすることがなかったA児が、少しずつクラスの友達の場所に来て遊び、そして、今は一緒にしっぽ取りができるようになった。これが、3歳児から入園して、「3年間積み上げたクラスの仲間の良さ」なのかと思った。3年間で「A君はこういう人」だという事をクラスのみんなが認めつつ、赤チームは自分事のようにA児をかばいながら青チームに訴え、青チームは、A児の不利にならないルールを考えて、折り合いをつけて遊びを楽しもうとしている姿に子どもたちの成長を感じた。このような心の育ちが、小学校の学習や生活、人への関わり方につながるのだと思うとともに幼児期に大切にしたい経験だと改めて実感した。

幼児期の学びの芽生え　生活発表会（劇遊び）の取組を通して

5歳児 1月末～2月

ねらい　クラスみんなで共通の目的に向かって、相談したり、協力したり、心を合わせたりする満足感や達成感を味わう

発達・教師の援助 環境構成のポイント　子どもたちが大好きになった絵本「ぎろろんやまと10ぴきのかえる」を劇遊びの題材に選び、オリジナルのお話づくりの過程で、共通の目的・相談・協力・満足感・達成感が得られるようにした。

実践内容

保育者

絵本にはかいてない、○○組だけのとびきり楽しいお話を、みんなで考えて、創っていけたら楽しいな、と思うんだけど、どんなお話がいいかな。

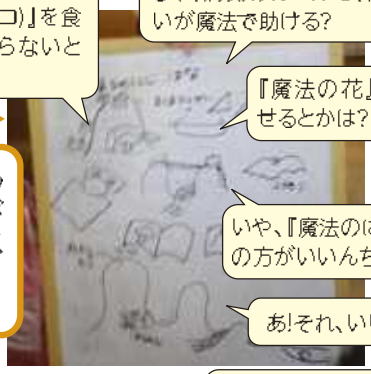
○○組のお話には、魔法使いが出てくるってのはどう?

じゃあ、魔法使いは、魔法の森に住んでるってのは?

なんかこう、魔法使いって感じの呪文ないかなぁ

あのさー、病気のカエルは、『しゃっきりだけ(キノコ)』を食べてもまだ元気にならないとかはどうかな

毎日、子どもたちから湧き出るイメージやアイデアを、ボードに絵や文字で書き足し、クラス全員がお話を共有できるよう、視覚的環境も工夫



じゃ、病気のカエルを、魔法使いが魔法で助ける?

『魔法の花』を咲かせるとかは?

いや、『魔法のにじの花』の方がいいんちゃう?

あ!それ、いいやん!

協同性

…シュアリンフォレーン…とか?

それいいやん みんなで言ってみよ。

シュアリンフォレーン! シュアリンフォレーン～～

言葉による伝え合い

カエルはどうやって崖を渡ることにする?

カエルのみんなでつながって橋になるってのは?

時にはクラス全員で…

よし! ちょっとやってみよう

こうやって、足をくっつけたら、花に見えへん?

ほんまや

だったら、もっと足を広げてみない?

時にはグループごとで…

豊かな感性と表現

思考力の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

自立心

保育者

お話づくりを通して、登場人物の心情、ストーリーを掘り下げていくことで、"相手の立場に立って考える心""相手を想う心""仲間"について考えてみたい…

この言葉! 劇遊びで使える!!

保育者

そのアイデア 面白い!

道徳性・規範意識の芽生え

コウモリはなんで、カエルが洞穴の『しゃっきりだけ』を取った時、怒ったんだろう?

①『しゃっきりだけ』はコウモリの大好物で、それを取られたからとちゃう?

②『しゃっきりだけ』は洞穴で光ってるやろ?だから、大事な宝やったんとちゃう?

③だからそれをコウモリは守ってて怒ったとか…

⑦じゃ、最後はみんな仲間やん

⑥じゃあ、カエルをコウモリの背中に乗せて、魔法使いのところまで連れて行ってあげる?

⑤なぁ、コウモリと魔法使いも仲間?だって普通、魔法使いって、コウモリのそばにいるやろ?

④でも待って!病気のカエルに『しゃっきりだけ』を分けてあげることにするなら、もう仲間やん

『しゃっきりだけ』じゃなくて、『しゃっくりだけ』ってのも、あったりしてー

それ、面白～い!

保育を振り返って　1年生につながるもの：想像力、創造性、言葉の伝え合い、信頼感、達成感

ストーリーを考えながら同時に、みんなでイメージした場面や情景を、身体で表現することも繰り返し楽しんだ。劇遊びの台詞は、好きな遊びの中で、気の合う友達と、魔法使いやカエル役になりきって遊びながら、湧き出てくるイメージを逃さず、劇遊びの中に取り入れていくことも心がけた。この時期、話し合いにより、誰かのつぶやきが、自他の新たなイメージやアイデアを生みだすきっかけとなり、広がり深まっていく。そこには、これまで積み上げてきた、互いを認め合える保育者、友達との信頼関係が土台となっている。そして、みんなで納得いくまで話し合い、共有していくことで、個人やクラスの確かな学びとなっている。

スタートカリキュラム

入学前に行う半日入学の工夫

5歳児　2月

ねらい

- 安心して半日入学に参加し、入学への期待を膨らませる（子ども）
- 子どもが自ら遊ぶ姿を観察し、一人一人の子どもの個性を知り、クラス分けなどの参考にする（教師）

ポイントと幼児期とのつながり

- 受付を済ませ、各遊びのコーナーに来た園児から好きな遊びを選べるように場を設定。
- 前半は自由遊びの時間、後半は10人程度のグループに分かれ、教室に入って過ごす。

実践内容

えほんコーナー

おりがみランド

ブロックコーナー

就学前施設と同じ環境が安心感の基盤

おえかきランド

自分で選べる遊び

遊びを通して周りの子どもたち同士で関わる

教室で

取組を振り返って

就学前施設と似た環境を用意することで、小学校の施設に緊張感をもって来た子どもたちが、自分の遊びたいところへ行き、スムーズに遊び始める様子が見られた。遊びの中で、自然と子ども同士が関わったり、会話をしたりする姿も見られ、安心して過ごしていることがうかがえた。そのような自然な子どもの姿を観察でき、入学後の児童理解につながった。後半は少人数で教室に入り、先生の呼びかけに返事をしたり、みんなで手遊びをしたりして、小学生になった気分を味わうなど、入学への期待につながったと思われる。

今までの経験と同じようなことに取り組み、自然と子どもの思いや考えを出せる環境や、傍に先生がいること、今、関わってくれる先生がわかることで安心し、子どもの小学校への緊張感や抵抗感が軽減され、小学校は楽しいところというイメージになり、そのような思いを子どもと共に実感した。保護者からは小学校が温かく迎えてくれたという感想も聞かれた。

スタートカリキュラム　安心感をもち友達とふれあう入学式　1年生　4月

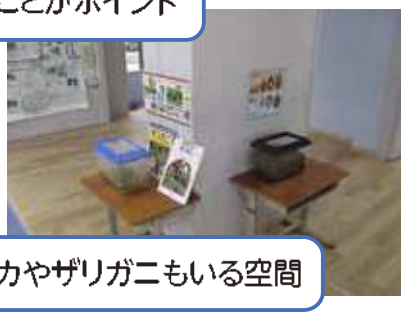
ねらい　就学前施設に近い環境を作ることで、安心して入学することができるようにする。

ポイントと幼児期とのつながり　連携先の幼稚園の教職員と合同で、入学式当日の教室環境を整え、新入生児童が不安を感じることなく安心して過ごすことができるようにした。

実践内容

友達とおもちゃを囲んで遊べる空間づくり!!

少し遊んだ風にしておくことがポイント



おもちゃだけでなく、メダカやザリガニもいる空間

【前日準備】

幼稚園の先生の協力を得ながら、全教職員で教室準備

- 教室の机や椅子を取り払い、絨毯を敷き、遊ぶことができるスペースづくり
- 就学前施設に近い環境づくり
  遊具（おもちゃ）を置き、絵をかいたり、折り紙をしたりすることができるスペース
- 教室前のオープンスペースの活用
  遊具や絵本、メダカやザリガニなどの生き物を配置

【入学式当日】

入学式受付後、新入生児童は保護者と別れ、6年生に案内されて自分の教室へやって来る。その後は開式までの間、同じ1年生の友達や6年生、教職員と一緒に、教室にあるもので思い思いに遊んで過ごす。少し緊張しながらやって来る新入生だったが、教室にあるもので遊んでいくうちに緊張がほぐれ、初めて会う友達とも自然と会話がはずんでいった。

式後は、教室で写真を撮り、保護者向けに式場で説明をしている担任を待っている間も遊んで楽しそうに過ごした。担任が教室へ戻って来た後は、絨毯の上に座って担任からの話を聞いたが、幼保で話を聞くときのスタイルで安心してしっかり先生の話が聞けた。ドキドキワクワクする小学校の初日を楽しい思い出にできるよう、のびのびとリラックスした雰囲気を作ることを心がけた。

取組を振り返って

入学式初日から椅子に座って先生の話を聞くことは、子どもによってはハードルの高いことかもしれない。就学前施設での遊びの経験が生かせる環境構成をすることで、安心し、友達とふれあい、自信をもってのびのびと過ごす姿が見られ、担任とも近い距離感で関わり、明日への意欲につながった。

スタートカリキュラム　安心感と自己発揮のスタートカリキュラム　1年生　4月

ねらい　子どもの発達や学びの様子、指導の在り方などを理解し、小学校入学当初のスタートカリキュラムを通して育む姿を校内で共有する。

ポイントと幼児期とのつながり　幼保での遊びや生活との接続を考慮し、安心して主体的に自己を発揮できるよう環境の設定や教師の関わり、活動のもち方を工夫する。
〈キーワード【安心】【安定】【主体性】【自己発揮】〉

実践内容

登校してから

自分の力で朝の準備をしてから、ブロックや折り紙、ドールハウスなど思い思いに遊びます。

帯時間

［ほっとタイム］歌をうたったり読み聞かせをきいたりして、ゆったりと過ごします。

1校時

［弾力的な時間割、合科的・関連的な指導］帯時間から音楽科、さらに国語科へと流れていきます。

2校時

［生活科・がっこうたんけん］ひみつの地図を片手に、友達と思い思いに学校中を探検します。

取組を振り返って

- 入学後間もない時期は、学校生活への期待感や緊張感、不安感など一人一人様々な思いが錯綜していることを捉え、幼児期の経験や雰囲気を取り入れた安心感と楽しみな思いがもてるような環境構成、歌や絵本に親しむひと時の設定、子どもへの寄り添いや共感を大事にした教師の関わりを意識することで、安心して学校生活を楽しみ、思い思いに活動して自己発揮する姿が見られた。家庭で子どもが保護者に喜んで話をすることが保護者の安心感にも繋がり、安心感や期待感の輪が膨らんだと考える。
- 安心感をもとに、子どもが主体的に考え、取り組み、自己発揮できる工夫をさらに図りたい。

スタートカリキュラム

幼保の保育者による読み聞かせ

1年生　4月～

ねらい

- 安心して、身の回りの準備を済ませ、毎日の読書時間に意欲をもって取り組む。

ポイントと幼児期とのつながり

- 幼児期に経験した手遊びや絵本を楽しみ、幼児期の生活とのつながりを創り、安心感やドキドキ・ワクワクした楽しい気持ちになるようにする。（子ども）
- 1年生の担任が幼保の保育者との連携で、子どもの発達にふさわしい環境や子どもへのかかわりを学ぶ。（教師）

実践内容

【子どもが意欲をもって読書時間に取り組むための絵本や手遊びを選ぶポイント】

- 絵本を一人で読んだり、見たりする習慣がない子どももいるため、ストーリー性のあるものより、見て楽しい絵本・ことばあそびの絵本を保育者と相談しながら選ぶ。
- 手遊びなども、安心できるよう幼保で経験してきたであろうものや、発達に合った内容のものを選ぶ。

手遊びのリズムに合わせて、体を揺らし、自然と座席に座り先生の方を向きます。

絵本を見やすい環境にすることで、子どもたちは身を乗り出して話を聞いています。

担任の先生と近い距離で読み聞かせ

入学後から、5月の第2週までの毎週金曜日の朝の時間帯を幼保の保育者による読み聞かせとして、計4回実施した。1回目には、まだ新たな環境に慣れていない子どもも、幼児期に経験したような手遊びのリズムに合わせて体を動かし、自然と座席に座り、安心して絵本に視線が集まっていた。子どもたちの興味のある絵本を選ぶことで、身を乗り出して話を聞く姿もあった。2回目、3回目になると読み聞かせを楽しみにしていた子どもは、登校後の身の回りの準備も、絵本の読み聞かせの時間までに終えておこうと意識するようになり、椅子に座って読み聞かせを待つようになった。読み聞かせが終わった後も、担任の話や朝の健康観察に落ち着いた様子で臨むことができた。保育者の温かな雰囲気に触れ、親しみを感じ、スタートカリキュラムの時期、子どもたちは金曜日を楽しみに登校していた。

取組を振り返って

子どもが、安心して登校し、絵本の読み聞かせを楽しみに目的意識をもって、朝の準備を主体的に行い、クラスでの活動に落ち着いて臨むようになったことは大きな成果と考える。また、教師も子どもの発達にあった絵本の選び方や環境の設定を学ぶことができた。課題としては、今回は幼稚園の絵本を借りたが、同じような1年生入学当初の発達に合った絵本が学校図書館には少なく、子どもが自ら見たり読んだりして楽しめるような本が足りないということである。学校図書の充実や幼稚園との本の交流も検討していきたいと考えている。

スタートカリキュラム

生活科・国語科「めいしこうかんをしよう」　1年生　4月

ねらい

クラスの友だちや教職員と仲良くなることで、自分のことを見守ってくれている人や知ってくれている人が学校にはたくさんいることを知り、安心して学校生活を送れるようにする。

ポイントと幼児期とのつながり

幼児期に培った人への信頼感や活動への意欲、言葉の伝え合いが基盤となった活動である。生活科と国語科の合科的・関連的な指導を意識し、児童は、名前と好きなものをかいた自分の名刺を作成し、クラスの友達や学校の教職員と名刺交換する。自分の言葉で楽しそうに伝え合うことで、交友関係を広げ学校生活をより楽しく過ごしていけるようにする。

実践内容

❶ クラスの友だちとなかよくなろう（国語科）

私の名前は○○です。
好きな食べ物は、
いちごです。

先生の名刺
先生のいる場所
名前　写真

❷ 先生たちとなかよくなろう（生活科）

ミッション　先生となかよくなって、めいしをこうかんしよう!

管理用務員さんとなかよし

教頭先生となかよし

ぼくの名前は○○です。
好きな食べ物は、
からあげです。
よろしくお願いします。

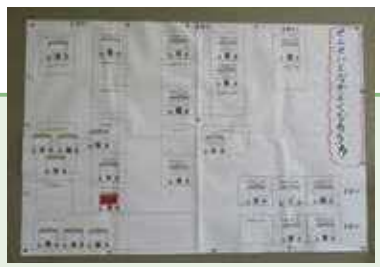
校長先生となかよし

保健室の先生となかよし

先生の好きな
食べ物は、
アップルパイです。
よろしくね。

4年生の先生となかよし

集めた名刺は、クラスで
学校マップに貼っていく



授業を振り返って

- 一人ずつ担当する教職員の名刺を集めるというミッションにすることで、楽しみながら先生たちに声をかけ自己紹介することができた。
- 集めた名刺を学校マップに貼っていくことで、学校探検への意欲につなげることができた。

スタートカリキュラム

算数科「わくわくがっこう」

1年生　4月

ねらい　2つのものの集まりを数図ブロックで1対1対応させ、数の多少を判断する方法を考える。

ポイントと幼児期とのつながり

子ども達は、保育の中で、帽子の数を数えたり、チームの人数を合わせたり、自然に物の数量を捉えるようになってきている。本時は、教科書の挿絵であらわされた2つのものの集まりの多少を調べる学習である。授業の導入段階において、子どもたちが学習のめあてを意識できるように、吹き出しの形をした「おはなしかあど」を使用し、2人組で自由に話をする時間を設けた。子どもたちは、これまでの経験を生かし、バケツやジョウロの数を数えたりしている。前時は挿絵を線で結び、1対1対応することで数の多少を調べたが、挿絵を数図ブロックに置き換えて並べ直すことで、数の多少が一目でわかることに気付けるようにした。

取った赤帽の数を数える園児

実践内容

①どんな問題かな

吹き出しカードを使い、2人組で自由に会話をしながら、挿絵の世界に入っていく。

②自分で考えよう

挿絵から考えたり、数図ブロックを使ったり自分なりの方法で数の多少を調べる。

③みんなで話し合おう

並べ方や多少を調べた結果について話し合う。

④ふりかえろう

数図ブロックで表すと一目で多少が調べられることを確かめる。

授業を振り返って

数図ブロックで表すと一目で多少が比べられることに加え、吹き出しカードを使うことによって、挿絵を基にした自由な発想が膨らみ、子どもたちの会話を引き出すきっかけとなった。今後も2人組での話し合いを中心に、思いや考えを伝え合うことを大切にしながら、発表への意欲へつなげ、友達との考えの相違に気づく中で、自分の考えを広げる機会にしたいと考える。

スタートカリキュラム

音楽科「うたって おどって なかよくなろう」「はくを かんじとろう」国語科「どうぞよろしく」　1年生　4月

ねらい

- 音楽に合わせて歌ったり体を動かしたりして、拍の流れにのって表現する喜びを味わう。
- 名刺カードを友達と交換しながら、自己紹介をする。

ポイントと幼児期とのつながり

子どもたちは、これまでの遊びや生活の中で、身近にあるものを楽器のようにして遊ぶ、リズムを感じる、即興的に歌う、友達と一緒に踊ったりするなど、音楽に親しんでいる。また、自分なりの表現やその楽しさを先生や友達と受け止め合いながら、友達と一緒に表現し、楽しさを味わう経験をしている。

実践内容

①時間割や学習活動の工夫

児童が1日を安心して楽しく始められるように、朝の会から1時間目を連続してとり、担任による読み聞かせや、歌や手遊び・ゲームなど園で慣れ親しんだ活動をする時間〈なかよしタイム〉を設け、10分間から15分間程度を使って本題材の指導を進めた。グループやペアでの活動を設定し、友達づくりの要素を入れることも意識して行った。

「ハンカチ落とし」

園で経験したゲームの後

『ひらいたひらいた』

②関連的な指導の充実

- 生活科「わたしのがっこう」の学習で、幼稚園や保育園での経験を交流した後、児童が園で歌ったり遊んだりしたなじみのある曲を一緒に歌ったり踊ったりするようにした。
- 題材「はくをかんじとろう」の楽曲『さんぽ』では、拍にのって歩き、出会った友達とジャンケンをして楽しんだ。翌日の〈なかよしタイム〉で、同様に歩きながら、曲が止まったところで友達と名刺を交換する活動を行った（国語科「どうぞよろしく」）。

「はくをかんじとろう『さんぽ』」

翌日

国語科「どうぞよろしく」

③学習環境を整える

友達の顔がよく見えるように円になって座ったり、伸び伸びと体を動かせるように机と椅子を教室の後ろに寄せて広い空間を作ったりして活動した。

「うたっておどってなかよくなろう『チェッチェッコリ』」

「はくをかんじとろう『手拍子でリレー』」

授業を振り返って

なじみのある楽曲を一緒に歌ったりすることで、子どもたちは自然と手足を動かしたり、歩き出したりして音楽を楽しむ様子が見られた。音楽科で歌にジャンケンを取り入れた学習に、国語科の「名刺交換」を組み合わせることで、楽しい雰囲気の中で自己紹介をすることができた。「はくをかんじとろう」では、椅子を円に並べ輪になって学習することで、消極的な児童も友達の姿を見ながら手拍子が打て、みんなが楽しい雰囲気の中で学習を進めることができた。

スタートカリキュラム

生活科「いちねんせいが はじまるよ」
道徳科「たのしい がっこう」

1年生　4月

ねらい

特別の教科 道徳「たのしい がっこう」と生活科「いちねんせいが はじまるよ」の学習を通して、楽しく安心して学校生活を送ることができるようにする。〈キーワード【安心】【主体性】【楽しみ】〉

ポイントと幼児期とのつながり

幼児期には、一定の生活習慣を身に付け、生活の見通しをもって安心して過ごしている。また、先生や友達との楽しい遊びや生活の中で、人とつながることの楽しさや、新しい生活への意欲や好奇心をもてるようになっている。そのような姿を生かし、話し合い活動や学校探検などの活動を通して、友達のことを知ったり、様々な人とのかかわりに気付いたりできるようにし、学校は楽しいところであるという期待感が膨らむようにする。

実践内容

①生活科〈安心をつくる時間〉

登校してからの準備や給食準備の流れを可視化⇒安心して活動に参加

登校後の朝の支度の仕方をイラストを活用して提示

お道具箱の中を写真で提示

②道徳科〈たのしい がっこう〉

導　入	展開前段	展開後段	終　末
1年生になって、楽しいことはどんなこと?	教材を見て、にこにこしているわけを話し合う。	これから楽しみなことはありますか?	楽しみなことを伝え合う。

入学してからの数日間を振り返り、楽しいことを発表することで前向きな気持ちをもたせる。

様々な人とのつながりに気付くことができるように、意図的に声かけをする。

小学校生活が希望溢れるものになるように、昨年度の写真を見せながら進める。

ぼくも運動会が楽しみだな。

楽しみを伝え合い今後の生活に期待感を高めさせる。

③生活科〈探検を通して、はてな?を共有し、解決する〉

教科書の絵や写真、学校探検や校庭探検から「はてな」を集め、みんなで解決する。また、様々な人との関わりにも気付くことができるようにする。

本を借りるためには誰に話したらいいのかな。

授業を振り返って

児童は友達と楽しみなことを交流したことで、お互いを知るきっかけになり、今後の学校生活に期待を膨らませている様子が見られた。また、探検活動や話し合い活動を通して、児童の疑問やつぶやき、思いを大切にすることで、主体的な学習につなげることができた。

つながりのある保育

数量や図形などへの関心・感覚
～環境構成を中心に～

5歳児　通年　算数科へ

ねらい　具体的な直接体験から数量・図形などに関心をもったり、感覚を得たりする。

小学校教育へのつながり　遊びや生活の中で、小学校の算数科につながる原体験ともいえる遊びや生活を大切にする。教師が意図して、遊びや生活の中で子どもが数量や図形に直接触れる環境を構成する。

実践内容

使いやすいように、同じ種類のものを集めて置きます。使う時、片付ける時に子どもたちは「分類する」という行動やその意味を自然に身に付けていきます。

毎日使う椅子も、5脚ずつ片づけています。数字「5」を明示するなどして物の数と数字が視覚的に結びつく工夫をしています。

ままごとの道具は、それぞれの置き場所に絵で示し、形や大きさの合った道具が片付けられるようにしています。丸、四角、様々な形に興味を持ち、きちんと片付けることで不足分を探す行動が生まれます。

スコップもかけるフックとスコップが1対1対応になるようにしています。一目で過不足が分かり、ひとつずつ大事に片付ける意識が育ちます。

いろいろな形の箱が分類された環境。形や素材を認識しながら遊びに必要なものをつくったり、転がして遊んだり、積み上げて高さを意識したり、形や素材の特性に対する感覚が育ちます。

●月●日●曜日、毎日数字や曜日を見て、自分の出席ノートと見比べながら楽しそうにシールを貼ります。毎日することで、数字に親しみ、数字や順序、一週間の単位に気付いたり、覚えたりしていきます。

積み木を安定良く積む方法を友達と相談し協同して遊びます。こうした遊びの中で、積み木の形や大きさなど図形等に関する関心・感覚が育っていきます。

スナップエンドウの収穫。子どもたちは喜びとともに、数の多さにも感激し、自ら数え出します。その後は、「いくつずつもらえるか」という必要感が生まれ、「分ける」行動も出てきます。その方法は様々で友達と試行錯誤の連続。対話したり、葛藤したりして、多くのことを学びます。

保育を振り返って

様々な素材（紙、箱、水など）、おもちゃや用具（積み木、砂場・ままごとなどの遊具や用具）、収穫物等に関わり、必要感から数えたり、比べたり、片付けの中で過不足を知ったり、就学前施設の環境は「算数の宝庫」と小学校の先生に言われることもある。保育者の意図ある環境構成と援助が子どもの学びに生きていく。就学前施設の保育者も1年生の算数の教科書や授業に学び、見通して、遊びや生活の中で具体物に関わり、数量、形、時間などの感覚を育てることを大事にしていきたい。

つながりのある授業　算数科「ものと ひとの かず」

1年生　12月

単元の目標　ある数量を他の数量に置き換えて考えたり、順序数に関する問題を解いたりすることができるようにする。

本時の目標　順序数を集合数にとらえ直し、図や式に表して考え、問題を解くことができるようにする。

幼児期とのつながり　学びをつなぐための教師同士の交流①

幼稚園を訪問し、本題材につながる幼児期の姿を知り、指導案に記載し、授業に生かすようにする。

就学前施設でも遊びや生活の中で「並ぶ」経験をしています。

ぼくは4番目だ。

巧技台からジャンプ!並んで順番を待つよ。

前から5番目。次かな?

先生「さあ、出発しますよ。今日は前から3人ずつ出発しましょう。」

■授業内容

「Aさんは3番目に並んでいます。Aさんの後ろには9人の人が並んでいます。みんなで何人並んでいますか」という問題を、「まる図」を使って考える。

■本時のポイント(主な支援)

- 問題場面をイメージできるように、挿絵を提示し、問題文を一文ずつ提示する。
- 図の書き方がわからずに困っている子がいれば、途中まで書いている図を配り、自己解決に導く。
- 「前から3番目、後ろに何人」という言葉を「まる図」と結び付けて集団で確かめる。

■事後研修での内容(主な意見)

学びをつなぐための教師同士の交流②

- 実際に並んでみたり、フープ(輪)を使用して、より「まる図」をイメージしやすくしたりするなど、体を動かす場面があると、授業に参加しやすく、自分事として捉えられるのではないか。
  ⇒次年度の同単元の指導に生かす
- 「前から何人」「ものの数え方」など、幼児期の生活の中でも使用している言葉も多い。小学校の学習内容を知ることで、幼保の保育者が学びへのつながりを意識した幼児期の生活を大事にしていけるのではないか。
- 記号としての文字ではなく、幼児期に言葉を豊かにする経験が大切ではないか。しりとりや言葉遊び、手遊び、聞いて想像する力など、就学前施設で当たり前に楽しんでいることを、小学校の教師も学びのつながりを意識して取り入れていくことが重要である。

授業を振り返って

- 幼児教育を知ることで、学びのつながりを認識することができた。ただ、「○番目」や「前から▲人目」といった言葉の意味を明確に理解させるには、実際に並んでみる、「まる図」がイメージしやすいようにフープなどを使ってみるなど、具体的に捉えさせる工夫があればよかった。
- 幼保の学びとして、小学校の学習内容を知ることで保育を見直す機会になった。例えば、幼児は「数詞」を覚えて使う時期でもあるが、絵本は1「冊」、鉛筆は1「本」など、保育者が意識して正しく使うことも算数につながることを改めて感じた。幼児期での豊かな経験とともに、保育者の役割の重要性を再確認した。

つながりのある保育

「帽子取り」

5歳児　9月

～体を動かす楽しさを味わい、チームの仲間と協力、葛藤する～ 体育科へ

ねらい

体を動かす心地よさを感じ、様々な感情体験をしたり、友達と協力したり、作戦を考えたりして、チームの仲間と心をつなげる楽しさを味わう。

小学校教育へのつながり

- 先生対子どもで帽子を取る遊びを始め、体を動かして遊ぶ楽しさを十分味わう。（様々な体の動きの経験）
- 繰り返し遊ぶ中で子ども同士が遊び始め、遊びのルールができていく。（規範意識の芽生え）
- チームに分かれて遊んでいく中で、葛藤場面が出てきて、様々な感情を体験する。（気持ちの調整力、協同性）

実践内容

〈帽子取り〉

- 相手チームの帽子を取る
- 帽子を多く取ったチームの勝ち
- 時には陣地あり、時には陣地なし
- 2チーム⇒3チーム（巴戦）
- 時には全員で実施、あるいは数人ずつ繰り出し
- ルールは、子どもの必要感からその都度話し合って決めていく。
  （例:「転んだ園児の帽子は取らない」⇒「帽子を取られないようにわざと転んだ場合は取ってもよい」など、ルールが追加される）

子どもの様子によって、遊び方のバリエーションが選べる運動遊び

相手の帽子を取ろうと本気で追いかけ、狙っている

健康な心と体

協同性

道徳性・規範意識の芽生え

数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚

チームで力を合わせて取ろうとする。

思考力の芽生え

言葉による伝え合い

自立心

保育を振り返って

思いきり体を動かす心地良さや様々に体を動かす楽しさを十分味わえる帽子取り。一人一人のめあてによって、新しい動きが引き出され、洗練され、自分のものにしていく。楽しいからもう一度やりたいと遊びが継続していく。また、その中で、スリル感やチームの仲間との思いの通い合いや協力、喜びや悔しさ等様々な感情を体験している。同じめあてをもち、力を合わせたり、思いを重ねたりする経験が積まれている。

つながりのある授業

体育科「マット あそび」
なりきったり、イメージをもったりして主体的に活動する　1年生　6月

単元目標　マット遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、いろいろな方向への転がり、手で支えての体の保持や回転をすることを身に付けることができるようにする。

ねらい　マット遊びに進んで取り組み、様々な体の動かし方を工夫するとともに、友達と一緒に取り組む。

幼児期とのつながり　見立てる、なりきる、めあてがもてるなど、子どものやってみたいという思いが生まれるような環境設定

実践内容

マットの端に草むらに見立てたマーカーを置き、マットから落ちないように

壁にアザラシやキリンの絵を貼り、どの動物までいけるか、挑戦

同じ場でもウサギやイモムシなどになりきることで「跳ぶ」「這う」などの違う動きを楽しむ。自分でゴムの高さを変えながら挑戦することができ、動きのバリエーションが豊富になる。

踏切板をマットの下に敷き坂道にすると転がりたくなり、後ろ回りもやってみようと…

玉入れの玉を砂利に見立てて 並べ方を考えて置き、跳び越したり、側転したり、様々な遊びを楽しむ。

授業を振り返って

多くの子どもたちが経験したことのある動きを、マットの置き方や場を工夫することで、就学前施設でもしたことのある遊びとして、安心しながら取り組むことができた。この時期の発達の姿として、「見立てる」「なりきる」「めあてをもつ」などの環境構成の工夫により、挑戦しにくい子どもも、「これならできるかな。やってみようかな」という思いから活動しやすく、様々な体の動きが引き出された。また、自然と子どもたちが誘い合ったり、教え合ったりしながら活動する様子も見られた。

つながりのある保育

「ハーモニーピザパーティーをしよう」

5歳児　6月　生活科へ

ねらい　クラスみんなで共通のめあてに向かって、年少・年中児や教職員への思いを膨らませながら、友達と思いを出し合い、クラスみんなでハーモニーピザパーティーの準備を進めることを楽しむ。

小学校教育へのつながり　事前に幼保小合同で保育指導案の検討・心が動く材料や場などの環境構成・協力して準備を進める子どもの姿の見取り

実践内容

年長の自覚と喜び

幼稚園のみんなが喜ぶ美味しく、楽しいパーティーを、年長組のみんなで相談して、力を合わせてしよう

園を代表して小学校のハーモニーフェスティバルに参加

収穫・興味関心のある遊び

昨年度から育ててきた玉ねぎとジャガイモの収穫

大好きなピザ屋さんごっこの遊び

相手意識・相談・準備

“たまじゃがピザ”をつくって、幼稚園のみんなに喜んでもらおう

みんなでパーティーの準備をしよう

思いを共に味わい、達成感

ハーモニーピザパーティーで美味しく食べて、踊りを見てもらって、最後まで楽しんでもらえて嬉しいな

保育を振り返って

・ジャガイモ、玉ねぎの収穫、ピザ屋さんごっこ、学校行事への参加から、自分たちで「玉じゃがピザ」「ハーモニーピザ屋さん（店名）」などやりたいことを決定し、それを実現できることが意欲になった。

・「看板づくり」「ポスターづくり」「飾りづくり」の3つから自分で選んだことで、主体的に活動し、一人一人が夢中になって準備する姿が見られた。

・相手意識をもち、クラスで共通のめあてに向かって準備を進める姿は、小学校の授業（特に生活科）とのつながりがあり、幼稚園では、心動かす遊びや生活などの様々に豊かな経験が、子どもたちが次なる遊びや生活を創り出していく土台になっており、幼小ともにその過程の中に深い学びがあることを学んだ。

つながりのある授業

生活科「なかよしいっぱい だいさくせん」 1年生　6月

ねらい

通学路で出会う人（見守り隊の方）と仲良くなるための「なかよしの会」に向けて、自分が考えたことを生かそうとする。

幼児期とのつながり

① 子どもの心がときめき、心が動く幼児教育の環境構成を参考。（豊富な材料、特別感のある材料、出し方・置き方の工夫など）
② 魅力的な必要感のある活動（通学路で出会う人と仲良くなるための「なかよしの会」）の設定。
③ 子どもの安心とワクワクを支える教師の働きかけ（共感する、認める、一緒にするなど）

実践内容

（園）ハーモニーピザパーティー（P.74）の環境

幼児教育から
学ぶ
生かす
児童理解

本時の環境（数種類の材料を準備し、子どもたちが選択できる）

今日は何を
「目的意識」
めあてが明確だと、子どもは夢中になって取り組みます。

だれのために
「相手意識」
相手がいると、子どもたちは、より動き、燃えます。質の高い学びに。

本時の様子「なかよしの会」に向けて準備を進める子どもたち

大きな旗を飾って迎えたいな。顔をかくと喜んでくれるかな。

大きな看板をつくりたい。みんなで協力して作ろうよ。

もっと仲良しになって「ありがとう」を伝えたいな。

ナイスアイデアだね。見守り隊の人はぜったい喜ぶよ。

授業を振り返って

子どもの主体性や意欲を引き出し、夢中をつくるために、幼児期に培ってきた子どもの力を信じて、子どもとともに考えること、子どもに任せてみることを大切にしてきた。教師の役割は、その子どもの思いや願いを実現できるように、環境を整えたり、支援したりしながら導いていくことだと思っている。「大きな旗を作りたい」「大きな看板を飾りたい」という子どもたちの願いを実現するために、模造紙とポール、横長の段ボールなどを用意したり、子どもたちのほしいものを次の時間までに用意したりした。いろいろな材料を目の前にして、子どもたちは目を輝かせ、見守り隊の人たちのために心を動かして夢中になって活動する姿が見られた。見守り隊の人をもっと身近に感じ、思いがさらに深まるよう、「なかよしの会」までに見守り隊の方々への相手意識が深まるよう働きかけた。

つながりのある保育

「いろみずあそび」

5歳児　6月

～興味が広がる、深まる環境を用意することで考える、試すをじっくりと～　図画工作科へ

ねらい

インクの透明感のある美しさや色の魅力を感じ、色の微妙な変化や3色から無数に色を創り出す楽しさを存分に味わう。
様々な色に名前があることを知り、より繊細に色を感じ取ろうとする。

小学校教育へのつながり

- 3歳児や4歳児から絵具での色遊びを経験してきている。色の濃淡、混色の多様性や微妙な違いの気付きを楽しめる5歳児ならではの色水遊びを経験することで、試行錯誤しながら自分なりのめあてに向かう楽しさや粘り強さ、豊かな感性、思考力の芽生えを培っていく。
- 準備物、環境
  インク（赤青黄の3原色）を薄めた液、理科実験用で微量ずつ液を出せる丸型洗浄瓶（250ml）、スポイト、小さいスプーン、マドラー、たくさん色水をつくれるように透明カップ（70ml、60ml）を200個、防水のためラミネートした伝統色一覧表、色が見やすい・わかりやすいようにテーブルクロス（白）をかぶせた机。

実践内容

保育を振り返って

透明度が高く、美しさを感じ、「きれいな色をもっとつくりたい!」という思いから、さらに色を混ぜてつくっていった。少量ずつ加える色により、変わる色の違いや偶然できた色などから、なぜこのようになるのかを考えたり、友達と同じ色に挑戦してもうまくいかなくて、その時々で考え、試行錯誤しながらも解決に向かったりする姿が見られた。様々な色の美しさを感じ、遊びを通して色への興味や感覚が高まっていった。

つながりのある授業

図画工作科「カラフルいろみず（造形遊び）」

1年生　6月

ねらい

楽しくいろいろな色水をつくることから思いついたことを試す学習活動に取り組み、つくり出す喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする。

幼児期とのつながり

① 子どもの心がときめき、心が動く環境構成（ストーリー性、豊富な材料、特別感のある材料など）
② 魅力的な自由度の高い活動（自由な発想・表現活動が特徴の造形遊び）
③ 子どもの安心とワクワク感、学習を支える教師の働きかけ（共感する、認める、問いかけるなど）

実践内容

幼稚園の用具を借用

幼保の先生とともに考える環境

- 幼児期に行う「色水遊び」とはどんなものか。
  幼保での「色水遊び」を見て知る時間設定
- 幼保にある魅力的で豊富な用具を使用
- ストーリー性のある設定
  （色水研究所・博士と研究員）

自分で作ったたくさんの色水

【色を混ぜてできる様々な色への気付き】

色を混ぜて、大好きな色を作ろう。水と混ぜると、絵の具の時より色が少し薄くなるね。たくさんの色水を混ぜると、色が透明になったよ。

【色や並べ方などの面白さ、楽しさを感じている】

みんなで作るとたくさんの色が作れたよ。友達の色と合わせたら、もっと楽しくなったよ。色がきれいだな。

いろいろためして はっけんしよう！

【色水をどのように並べるか考えている】

たくさんの色ができてジュース屋さんみたい。仲間の色を集めて並べると楽しいね。虹色になるように並べてみたよ。

授業を振り返って

図画工作科の「造形遊び」は、活動内容に自由度があり、活動の発展性などが子どもたち自身に開かれている学習活動である。造形遊びのように、材料や場所、空間などの特徴から発想し、関わりながら行う造形活動は、幼児期に行われる遊びとよく似ている。そのため、幼児期の保育実践を生かしやすく、また、子どもの育ちや学び（豊かな感性、試行錯誤、思考力、自分の願いを実現する粘り強さ等）にもつながっている。子どもの夢中度も高く、架け橋期の1年生にとって大切にしていきたい活動であると実感している。

つながりのある授業

生活科「いきものとなかよし」

1年生　10月

単元の目標　継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物の生態、変化や成長の様子について考え、それらが生命をもっていることや、成長していることに気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、生き物に親しみをもち、大切にすることができるようにする。

本時の目標　生き物の世話をしたり観察したりして、気付いたことや感じたことを友達と伝え合い、育てている生き物の様子や特徴、日々の世話の大切さに気付くことができるようにする。

■事前研修の内容

◆**指導案検討**（研究主任、1年・2年担任、幼保小連携・接続主任、幼保の保育者）

- 単元に対する教師の願いの共有
  自分の言葉で生き物の魅力や世話をすることについて語れるようになることを目指したい。主体的に活動することを意識して、「命の大切さ」に気付いてほしい。
- 幼児期の経験を知る
  単元につながるような幼児の姿を共有（ダンゴムシやバッタなど虫の飼育、蝶の羽化に関わる経験など）
- 学習を深めるために
  飼育ケース（丸形の浅い物）にすることで、友達と顔を突き合わせて話す環境づくり
  継続して関心がもてるように、気付きや情報を付箋で共有
  1年生が必要な情報を収集しやすいように、就学前施設の科学の絵本などを活用

◆**事前授業**（別の学級で事前に行う授業）**と授業後の協議**（1年・2年担任、幼保小連携・接続主任、保育者）

- 幼児教育の視点から提案した事前授業
  児童が持つ説明用原稿があると、教師は支援に入りやすいが、読むことに必死になる姿がある。生き物を見たり、触れたりしながら自然に会話している姿も見られたので、伝えたい気持ちを大切にできればよい。
- 幼児教育の視点から述べた内容
  飼育する生き物を自分たちで決め、世話をしていることで、生き物の特徴への気付きと生き物に対する愛着が生まれている。それにより友達に自分の思いを伝えたいという思いが深まることになる。

■本時のポイント

- 指導案検討や事前授業を通じて学んだ幼児教育の視点を生かした環境構成を工夫する。
- 当日までに、生き物に関する本や図鑑などを用意し、生き物への興味・関心が広がりやすいようにした。また、子どもと考えためあてを図に表し、単元の流れを視覚化できるようにした。さらに、日々の生活の中で生き物との関わりを大切にし、生き物に愛着をもてるように、掲示板で情報共有した。

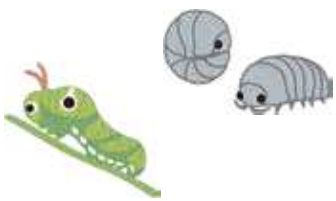
■授業・交流内容

環境構成

教師の願い

観察から気づいたことを共有したい。

授業の中で子どもたちが主体的に考えためあてと授業の足跡⇒可視化



めあてがわかり、自分たちで意識をもってほしい。

つながりたくなる環境構成の工夫①
生き物を挟んで向き合う机の配置
グループの規模(5グループ)

つながりたくなる環境構成②
伝えたい相手がいる
伝えたいもの(生き物)がいる

興味をもって
育てたからこそ
わかる気付きだ。
その意欲を
大切にしたい。

子どもたちが
育てたいと
思った生き物を
飼育させたい。

触っても大丈夫だよ。
触る?

動画だと
わかりやすいな。

へえ。知らなかった。

ヤゴの顎は
伸びるんだよ。

■事後研修の内容

- 原稿を読まずに、自分たちの言葉で話すことで、より主体的に活動していた。伝えることが苦手な子どもも自ら作成した動画をヒントに相手を意識して伝えようとしていた。
- これまで生き物と関わってきたからこその、生き物への興味や愛情が感じられ、意欲的に活動していた。
- 話すことよりも生き物を触ることをメインにしていたグループもあったが、生き物を介して、自然な言葉のやり取りがあり、友達と関わっている姿があった。
- つながりたくなる環境・主体的な活動になる環境があり、友達と一緒に学びやすい環境であった。
- 単元について就学前の子どもの様子を聞いたり、授業作りに参加したりするなど教員同士で交流したことで、幼児期の経験を踏まえた学習になった。肯定的な子ども観・環境構成の工夫・子どもの興味関心と経験を生かした活動の展開など、積み重ねられるようにしたい。
- 生き物の紹介で、子どもが「この子は」と1匹ずつ違うことに気付いて、紹介していた。違いに気付き、愛着をもつことができていた。

授業を振り返って

- 幼保小の教員・保育者で話し合い、アイデアを出し合ったことで、子どもの興味関心にあった活動にすることができた。子どもたち自身が、生き物に愛着をもって、自分たちがしているという意欲や主体性をもって活動できた。
- 単元のねらいを共有し、どのように自分たちの言葉で表現していくのか、言語能力の育成をはじめ生活科の学びについて一層考えていきたい。

子ども同士の交流

図画工作科「すなやつちとなかよし」

1年生・5歳児　5月

ねらい

5歳児: 小学生や他園所の幼児と出会い親しみをもつ。砂の感触を楽しみ、自分なりに工夫したり試したりして、砂や水に触れて遊ぶことを楽しむ。

1年生: 5歳児と一緒に活動することを楽しむ。砂に触れることを楽しみ、山や川をつくったり型押しをしたりして、手や体全体の感覚を働かせ、活動を工夫する。

本時のポイント
(事前研修の内容)

- 年度で初めての交流なので、幼保小でのグループは作らず、一緒に楽しいひと時を共有することや、自分のしたいことを試したりできるようにする。
- 幼保の砂場の環境を参考にし、遊具や用具などの環境を準備する。
- 当日までに一緒に砂遊びをすることを幼保小の子どもたちに知らせ、活動や関わりに意欲がもてるように工夫をする。

実践内容

環境構成
教師の願い
子どもの言葉や思い

同じ遊びに興味をもっている幼保小の子どもたちが、一緒に活動できるように、砂場の場所を遊びの種類で分けておく。

子どもたちが安心して活動に取り組めるよう優しい言葉かけで見通しがもてるように話そう。

おはようございます!楽しみだね。

教師も裸足になって、子どもたちの気持ちに共感したい。

自立心

力を合わせて山をつくろう。

協同性

<砂場の用具>バケツ・スコップ・型押し・お皿・コップ・ふるい・じょうろなど

幼保小の子ども同士がつながれるように、橋渡しをしよう。

川ができた。どんどん水を流すよ。

協同性・思考力の芽生え

いいよ!

言葉による伝え合い

砂の感触、気持ちいい〜!

豊かな感性と表現

1年生、上手だな。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

豊かな感性と表現

お団子たくさんできたね。

広場に咲いていた花も飾って…子どもの考えは何でも受け入れよう。

いいよ!

協同性

こことつなげようよ。

■事後研修の内容

<教員・保育者の学び>

小学校の教員: 子どもとともに遊ぶ幼保の保育者の姿を見て、さりげなく援助し、子ども自身ができたと思えるようなかかわり方を学んだ。また、幼保の砂場の環境を取り入れたことで、子どもの活動の幅が広がったと感じた。今後、子どもの発達に合った用具などを学んでいきたい。

幼保の保育者: 小学校の授業に幼保で経験していることと同じ内容があることが分かり、小学校での学びを意識しながら、幼児期での砂場遊びの経験を十分に充実させることが大事だと感じた。

<子どもの姿>

1年生の姿: 幼保の子どもたちと一緒に活動することで、幼児期の経験を思い出し、安心感や意欲をもつことができた。

5歳児の姿: 1年生に刺激を受け、その後の園生活でも砂遊びを意欲的にするようになった。

交流を振り返って

同じ砂遊びの活動を生かし、ともに活動する授業では、事前の話し合いで、それぞれのねらいを明確にし、ねらいを互いに共有しておくことが重要である。それぞれのねらい達成のために、環境を考え、教師・保育者の支援の仕方をともに考えることができた。保育・授業の写真や記録などから、幼保小の教師・保育者が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を読み取り、架け橋期の子どもの育ちや学び、発達の似たところや、違いを確かめ合い、つなぐ視点を、今後、より意識していきたい。また、事後研修を確実に行えるように工夫したい。

子ども同士の交流

「秋のお宝パーティー」生活科「あきといっしょに」①

5歳児・1年生　11月

ねらい

5歳児: 小学校の教室に慣れ自分の思いを出す。より活動を楽しむために自分なりに工夫する。
1年生: 秋の自然に親しみ、自分が考えたものを幼稚園の友達と一緒に楽しむためにつくり方や遊びのルールを工夫する事ができるようにする。

本時のポイント
(事前研修の内容)

- 1校1園の交流(「あきみつけ」で会う・幼稚園で会う・招待状を出す等)で回を重ねる。
- 「あきみつけ」で偶然を装って出会い、幼小とも「あきみつけ」をしていることの意識づけをする。(サプライズは意欲を生む)
- 幼稚園児がドングリで遊ぶ様子を1年生が見に行く。(「やってみたい」を生み出すきっかけ)
- 園児と1年生で計画書を一緒につくる。(対話を生み出す工夫)
- 幼稚園で遊んだ物を当日の授業に持っていく。(お客さんにならず互恵性を意識した工夫)

実践内容

グループに分かれて、かざり、ドングリ人形、的あて、楽器、ピタゴラ、迷路をつくって遊ぶ。

<当日の子どもの姿より>

- 選択肢が多い環境は自由度が高く、ワクワクした気持ちになり、意欲的に動き出す姿が多かった。
- 遊びのチームによって子どもの姿が様々であった。互いの意見を聞き合いながら進めようとするグループもあれば、個々が自分のしたいことをしているグループもあった。
- つくることだけではなく"試す"ということも大切な遊び・学びである。繰り返して試す中で気付いていることがあった。
- 5歳児は目的意識をもって遊ぶというよりは、今やりたいことをやりたい!という姿が多く見られていた。

先生の話を真剣に聞く
5歳児と1年生。ともに学ぶ

広々空間
豊富な材料
自分で選ぶ
自己決定
主体性

押さえて
おくね!

交流活動後の話し合い<単なる"交流"から合同授業へ!>

- 環境を5歳児担任と1年生担任が協働してつくっていった。幼稚園の紙の整理棚やソフト積み木などを持ち込むなど、双方の環境をミックスしてよりよいものに改善できた。
- 互いの子どもの姿を今までの交流を通して知っている。また、互いの教師の思いや子どもに対する願いも理解し合える仲になっているからこそできた授業だった。

交流を振り返って

- 幼稚園で遊んでいた物を持ち込んだことについて、その環境の是非を今日の子どもの姿から考えていく。
  →幼稚園の子どもは"自分たちの遊び"と思っているが、1年生にとっては自分の遊びになっていなかった。
- 1校1園、少人数で両教師共に子どものことがよくわかっているからこそできる取組だった。
- もっと"秋"を意識させるような教師の関わりや発問の仕方もあっても良かったのではないか。

子ども同士の交流

「秋のお宝パーティー」生活科「あきといっしょに」②

5歳児・1年生　11月

ねらい

5歳児: 自分の思いを伝え合う。共通の目的に向かって遊びを進める。
1年生: 幼稚園の友達と楽しむために、遊びやルールの工夫を考えたもので遊び、遊びやルールが楽しめるものだったかを考える。

本時のポイント

★ 環境構成
♥ 援助

★教材は幼稚園からの持ち込みだけではなく、1年生と共有できる新しく大きな段ボールも出す。
⇒環境の再構成・見直し
★子どもたちが納得できるまで遊べるような時間の余裕をもつ。⇒時間の保障
♥自分の思いを押し出す園児①には幼稚園の保育者が主に関わり、同じピタゴラグループの意思表示が得意ではない小学生A児・B児が力を発揮できるように考える。園児②には自分のめあてや目的に向かえるよう関わる。⇒個へのねらいの共有・援助の工夫・ねらいの明確化

実践内容

それぞれのグループが、より楽しめる「秋のお宝」をつくり、完成させ、お客さんになって遊び、その後、自分たちで振り返りをするという流れで進めた。

- 継続することで、それぞれのグループに幼小の担任が個別にねらいをもって関わることが可能に!

<子どもの姿より>ピタゴラグループ(園児①・②、1年生A児・B児)

- ガムテープを切って「あと何枚?」「どれくらいの長さ?」と自ら発言するA児。A児の姿が意欲的で誰かのために何かをすることの意義を感じているように見え、成長を感じる。
- 幼稚園の保育者がじっくりと関わることで、控えめなB児が最後まで自分のやりたい遊びをやりきることができ、達成感を味わうことができた。
- 園児①も②も"コースをつくってお客さんに来てもらう"という意識をもつことができていた。
- 振り返りの場面で、B児は「自分たちがつくったゲームにたくさんお客さんが来てくれて良かった」という発表をした。B児を見る同じグループの子どもたちの視線からも"仲間"としての一体感や聞こうとする態度が伺えた。
- どちらの校種の子どもたちも、幼稚園の保育者にも小学校の先生にも話をし、信頼できるようになっている。今までの積み重ねの成果だと言える。

■交流活動後の話し合いより

- A児が誰かのために何かをして、友達と協力している姿が見られたことに成長を感じた(小の担任)。
- 全体を通して、前回よりも緊張感が無く遊ぶことができていた。時間の余裕もあり、それぞれが満足いくまで遊ぶことができた。交流の積み重ねの意義を感じた。
- B児が最後まで自分のコーナーをやり遂げられて良かった。新しいコースも増設したことと、幼稚園の保育者が間に入って役割を見つけられるように言葉をかけたりしたことで、最初は遠慮がちだったA・B児もだんだん意見を出したり、自分ができることを見つけて主体的に動くように変化していった。
- グループの4人それぞれが自分の目的に向かうのではなく"共通の目的"に向かえたことが良かった。

交流を振り返って

- いつもは自分!自分!の子どもに"待つ・見守る"という姿勢(1年生)が見られ、年下の園児が一緒だからこそできる経験だった。
- 相手意識をもつ、いろいろな人と関わる楽しさや面白さ、難しさを味わう経験ができた。
- 深い対話につながる基礎になるコミュニケーション能力の土台が子どもの姿から見えた。
(相手の表情を見る・気持ちを想像する・思いを汲み取る・譲歩する・気持ちを調整するなど)

教師の学び

- 子どもが安心安定してこそ、幼小どちらの教員が関わっても自分の思いが出せる。
- 互いの教師の持ち味を生かす授業・保育ができた。
- 前回の合同授業の反省を生かし、双方で話し合い、授業を再構築(環境の再構成)できたことが連携の意義。
- 個の理解、個への願いが子どもの夢中を引き出す第一歩であり、個別最適な学びを意識し、意欲をいかに引き出し、継続させていくかをともに考えたい。

次への課題

- 連携の意義をどうやって学校全体に広げていくか。
- 幼小共に、少人数で交流がしやすい、一校一園だからこその交流の一事例である。
そういう地域や規模の幼小のモデルとなるよう、今後も交流・連携・接続のあり方を探っていきたい。

子ども同士の交流

生活科「(京都御苑での)あきみつけ」

5歳児・1年生　9月

ねらい

5歳児：1年生と一緒に秋の自然の中で遊ぶことを通して、1年生になる期待や憧れの気持ちをもつ。

1年生：5歳児に親しみをもって一緒に「あきみつけ」の活動を楽しむ。

本時のポイント

事前に教職員同士で5歳児と1年生のグループを決め、5歳児や1年生にグループのメンバーを知らせておく。1年生は自分のグループの5歳児の名前を覚え、5歳児から呼んでほしい名前をテープに書いて当日、服に貼った。また、1年生は当日の活動内容をあらかじめ考えておき、グループの友達に提案できるようにした。

実践内容

まずは自己紹介

遊びタイム

松ぼっくりや落ち葉、枝を集めて音を鳴らしたり、飾りをつくったり…

枯草を集めて積上げ、同じように遊ぶ他のグループと高さを比べる競争へ‥

解散・お別れ

交流を振り返って

1年生は事前に活動を楽しみにできるよう遊びたいことを考えておくことで、活動のめあてや見通しをもち、グループ内で遊びを進めたり、5歳児に関わったりして、リーダーシップをとっていた。

事前に一緒に活動するグループを決めて、同じグループの友達の名前がわかっていたことで、5歳児は安心感や1年生への親しみをもつことができた。また、1年生は事前に5歳児の名前を覚えたり、5歳児に思いを寄せながら一緒に遊んだり、互いに名前を呼び合うことから、相手がしっかりとわかり、思いを交わし合いながら活動することができた。

子ども同士の交流

生活科「京都御苑の交流からの授業・保育展開」

～秋の自然物を使っての遊びや遊びに使うものを作る～　5歳児・1年生　11月

取組のねらい

5歳児: 御苑で集めた木の実や葉っぱなどを使って遊ぶことを1年生と一緒に楽しむ。

1年生: 5歳児を招待する「あそび大会」のために、秋の自然物を使った遊びを考え、工夫してコーナー作りをする。

取組のポイント

- オンラインで作品紹介の交流をした後、「幼稚園、保育園の友達と一緒に遊びたいね」「僕がつくったけん玉を見せてあげたいな」等の声が1年生から上がり、「あそび大会」に5歳児を招待することになった。
  →自分たち（1年生）の願いを実現するために主体的に活動＝「あそび大会」への意欲
- 本時までにドングリや松ぼっくり、枝や落ち葉等の素材に存分に関わる時間をもち、紐やカップ、ボンド等子どもが使いたい材料を用意した環境設定。
  →子どもの必要感からの環境設定
- 5歳児と1年生が、互いのつくったものを見せ合えるように、単元の始めから幼稚園とオンラインでつなぐ。→子ども同士の関わりの継続、活動のつながり

実践内容

単元「あきとともだち」の始めから幼保小のオンライン交流

小学校の「あそび大会」に5歳児を招待する、1年生がつくった遊びのコーナーで1年生と一緒に遊ぶ授業

交流を振り返って

御苑での交流後からオンライン上ではあるが、5歳児が考えた遊びを1年生に紹介したり、1年生がつくったものを見たりして、ともに刺激を受けて日々、遊びが続き、1年生が発案した「あそび大会」への意欲につながった。「あそび大会」では、具体的につくったものを見て、5歳児は、より興味をもってコーナーで遊んだり、1年生にリードされたりし、親しみや憧れの気持ちをもちながら楽しんでいた。1年生は、楽しんでもらいたい、作品を使ってもらいたいなど個々に考えて関わり、自分たちが開催した「あそび大会」を5歳児が楽しみ、喜んでいる様子をみて、達成感や満足感、自信につながった。5歳児のためにという相手意識をもちながら取り組む様子に1年生の成長を感じた。

子ども同士の交流　生活科「もうすぐみんな2年生」Part1

5歳児・1年生　2月

本時のねらい

5歳児: 1年生に安心感や親しみ、憧れの思いをもって関わろうとする。地域の幼稚園や保育園の同年齢の友達と一緒に過ごす雰囲気を感じ、安心感や居心地のよさを感じる。もうすぐ1年生になることへの安心感や期待感をもつ。

1年生: 園児との交流会を計画し、学校生活について工夫して伝えるなどして、楽しむことができるようにする。

本時のポイント　・・・事前研修の内容（授業・保育（交流）をするにあたって）

互恵性のある交流のために

就学前施設、小学校の双方の子どもたちや教職員にとって互恵性のある交流にするための話し合いを行った。ねらい、日時、タイムスケジュール、内容、グループ編成など、子どもたちの姿を想像して、入念に話し合った。小学校教員が架け橋となって、電子メール・電話・対面などの方法で、三つの就学前施設との連絡・調整を行った。

当日までに工夫したこと

ストーリーを大切に　～子どもの心が動くしかけを～

小学校

①もうすぐ1年生になるみんなのニーズを考え、聞く。
「もうすぐ1年生だけど、今、どんな気持ちですか?小学校生活で知りたいことは何ですか?」など

㊫からビデオレター

③園児たちの質問をもとに、「1年生はたのしいよ」の会を企画・計画し、誘う。
「今度、1年生はたのしいよの会をします。小学校に来て遊びませんか?」

㊫からビデオレター

⑤園児のニーズに答えられるように、遊びや学習など、会の内容を考え準備する。
「ランドセルを背負えるようにしよう。学校の中も案内したいな。」

㊫からプリントで知らせる

就学前

②1年生のメッセージにワクワク。1年生の質問に答える。
「どうしたら友達ができますか?先生は優しいですか?どんな遊びや勉強がありますか?」など

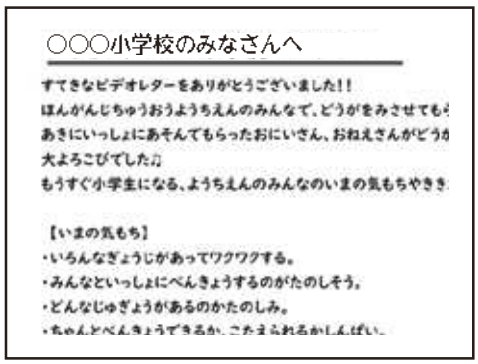
㊩から手紙・電子メール

④1年生からのお誘いメッセージを見て、小学校に行くことを楽しみに待つ。
「小学校のお兄さん、お姉さんと、また会える。小学校に行って、どんなことができるか楽しみだな。」

⑥会の内容、メンバーを知り、当日を心待ちにする。
「学校を探検できるんだって。楽しみだな。けんばんハーモニカの演奏もあるみたい。」

㊩㊫内容&グループ表完成

㊩:幼稚園・保育園　㊫:小学校


○○○小学校のみなさんへ

すてきなビデオレターをありがとうございました!!
ほんがんじちゅうおうようちえんのみんなで、どうがをみさせても
あきにいっしょにあそんでもらったおにいさん、おねえさんがどうが
大よろこびでした♪
もうすぐ小学生になる、ようちえんのみんなのいまの気もちやきき

【いまの気もち】
・いろんなぎょうじがあってワクワクする。
・みんなといっしょにべんきょうするのがたのしそう。
・どんなじゅぎょうがあるのかたのしみ。
・ちゃんとべんきょうできるか、こたえられるかしんぱい。

実践内容

「1年生はたのしいよ」の会

前半:遊び・勉強紹介

後半:学校探検・紹介

※交流は、小学校:約3名、園:約4名でグループを構成し、前後半ともに同じグループで行った

【出会い】みんなヨロシクね!
小学生が園児を迎えて、呼んで、グループのできあがり。みんなで自己紹介をした後は、幼稚園の先生が前に出て、みんなで一緒にエビカニクスを踊りました。すぐに打ち解けました。

あきみつけの時に出会ったお友達とまた会えてうれしいな。園児さんのために優しくしたいな。

小学校に来て、ドキドキわくわくするな。みんなでエビカニクスが踊れて楽しいな。

【遊び・勉強紹介】
- ランドセル体験
- ころがしドッジ
- 給食紹介
- けんばん演奏

など

【学校探検】
- 職員室
- プール
- 保健室
- 1年生の部屋

など

計画通りに進めます。園児に分かりやすく、楽しめるように頑張ります。園児も夢中になって体験します。

優しく手をひいて学校探検。あきみつけの時より、ずいぶん成長しました。園児は驚きと楽しさでルンルン。

園児さんに優しくできたよ。友達になったよ。カッコいい2年生になりたい。

小学校は楽しそうなところだな。楽しい勉強がいっぱいだ。早く1年生になりたいな。

【さようなら】みんなまたね!
園児さんがみんなで、「ひとりじゃないさ」の歌を歌ってくれました。この日のために、各園で連絡し合って、曲を決めて歌っていました。園児は入学を楽しみに、1年生はもうすぐ2年生になる自覚をもちました。

交流を振り返って

交流をしている子どもたちは、目を輝かせて生き生きと活動することができ、普段の生活では見せない一面も見られた。1年生の自信溢れた表情や5歳児の興味津々な表情を見ると、幼保小交流が価値あるものであると確信がもてる。子どもたちの学びは人と人の間で起こり、幼保小で交流して共に学ぶからこそ、子どもたちが相手を意識することで目的をもち、心が動き、工夫が生まれ、質の高い学びとなる。さらに、その中で、やり抜く力、頑張る力、自己肯定感、自尊心、コミュニケーション能力、他者への思いやり、我慢する心などの資質・能力が育まれていくのだと感じている。交流後の教職員のふり返りが十分にできなかったことが今後の課題である。お互いにとって素晴らしい交流であったことは確認したが、今後は、事後の話し合いを充実させ、次年度につなげたいと思った。

子ども同士の交流

生活科「もうすぐみんな2年生」 Part2

5歳児・1年生　2月

本時のねらい

5歳児: 小学校の学校生活の様子や学習内容を身近に感じ、学校生活への期待を膨らませ入学への意欲を高める 。

1年生: 5歳児に、学校生活の様子や学習活動を分かりやすく、自信をもって伝えることで、自分自身の成長を感じる。

本時のポイント

・・・「1年生はたのしいよ」の会に向けて事前準備

①生活科の学習で、入学してからの日々を振り返り、「自分や友達ができるようになったこと」「楽しかったこと」「わくわくしたこと」をテーマに出し合い、友達と交流する。

②入学前のことを思い出し、幼児が「知りたいこと」や「やってみたいこと」を考える。園の先生から幼児の様子を聞き、具体的な案を考える。

③考えた案をもとに、一度、実際に1年生同士で取り組み、お互いの活動に対してアドバイスし合い、3園の幼児がもっと楽しめる工夫を考える。

④考えた工夫を生かして、1回目の「1年生はたのしいよ」の会を開く。

⑤1回目の活動を通して気づいたことや考えたことを交流し、改善点を2回目の会で生かす。

⑥1・2回目の活動の経験を生かし、3回目の会を開き、「1年生はたのしいよ」の会を通した振り返りを行う。

実践内容

「1年生はたのしいよ」の会の流れ　会場:体育館

1.　5歳児と1年生があいさつ

2.　本時のめあての確認

1年生の小学校でのようすをあたらしく入学する1年生にわかりやすくつたえよう

3.　各部屋(ブース)の活動を幼児に紹介

国語科・掃除・GIGA端末・図画工作科・算数科・持ち物・体育科・音楽科・生活科・給食
(計10ブース)

図画工作科の部屋

持ち物の部屋

掃除の部屋

4.　小学校の様子の紹介

各部屋（ブース）に分かれて、5歳児に小学校の様子を紹介し、5歳児が実際に体験する。
5歳児は、1年生の話を聞き、入学への期待を高めることができた。

GIGA端末の部屋

1年生が、5歳児にGIGA端末の操作を説明し、実際にGIGA端末を使う体験をしました。

音楽科の部屋

1年生が、音楽科で学習した曲の合奏を5歳児に披露した後、5歳児が打楽器を選び、一緒に合奏をしました。

算数科の部屋

1年生が、5歳児に算数科で学習した形の特徴などを説明し、一緒に色板を使って遊んでいます。

給食の部屋

給食の献立を紹介したり、給食当番や準備のしかたを説明したりしました。

5.　子どもたちの感想

5歳児：幼児からは、「楽しかった」「早く1年生になりたい」「掃除のところが面白かった」「体育が面白そう」「早く入学したい。小学校も楽しそう」などの感想が返ってきた。

1年生：幼児から感想を言ってもらい、「感想言ってくれて、ありがとう」「やってよかった」「楽しんでもらえて、うれしかった」など自己肯定感を高めることができた。

交流を振り返って

子どもの学び：幼児に小学校生活の楽しさを伝えるために自分たちで工夫し、改善しようとする姿が見られた。

教師の学び：1年生が幼児に対して、小学校の魅力を伝える活動を通して、園の先生とのつながりを深めたことで、小学校の教師は、幼児が園で育んだ資質・能力を知ることができた。
今回の交流は、1年生が考えた各部屋（ブース）をつくり、紹介したが、来年は事前に幼児にリクエストを聞くなどして、「幼児が知りたい学校生活」のブースをつくってもいいと思った。今回はできなかったが、就学前施設と小学校の教師が事前・事後の話し合いの場を持ち、一緒に取り組めたらより良い交流にすることができると思った。

子ども同士の交流　3歳児と育成学級との交流

通年

ねらい

幼稚園:育成学級との交流を通して、小学生と心を通わせる。
小学校:3歳児との交流で園児と心を通わせることで、自己有用感を高める。

実践内容

水遊び

今年度最初の交流です。6月に幼稚園のプールで一緒に水遊びをしました。

おいもパーティー

11月においもパーティーをしました。3歳児がパーティーに誘ってくれました。

豆まき・鬼ごっこ

2月に豆まきやおにごっこをしました。小学生は少し照れくさそうに遊んでいました。

大根プレゼント

3月に小学生が育てた大根を3歳児にプレゼントしました。お味噌汁にして食べました。

★上記の他にも、7月・9月・10月に3歳児と育成学級では様々な交流を重ね、心を通わせてきた。

交流を振り返って

1学期・2学期・3学期と単元配列表をもとに、3歳児と育成学級の交流について計画をした。年間を通した交流では、園児や小学生の生き生きとした表情が見られ、園児や小学生にとって双方のねらいが達成できる有意義な時間となった。一方で、6年生は思春期にさしかかり素直に楽しさを出すことができないような場面も見受けられた。
今年度の取組をきっかけに、交流の在り方や新たな取組等を検討していけたらと考える。年度が変わることで子どもたちの構成メンバーや様子も変わり、子どもたちの成長にとって必要な取組も変わってくる。交流の目的・内容・時期・回数等、子どもたちを中心に据え、今後も年度ごとに幼小の教職員の連携を密に取り組んでいきたい。

子ども同士の交流　4年生保育交流　総合的な学習の時間

年4回

ねらい　「共に生きる～くらしやすいまち○○地域～」という総合的な学習の時間に、「保育園で自分たちにできること」を考える課題で、園児との交流を通して、共に生きる喜びや支え合いを感じるとともに、児童の自己肯定感を高める。

ポイント　4年生が保育園に行き、園児と交流をした。4年生を4グループに分け、4回の保育交流で、全てのクラスの園児と交流できるようにした。

実践内容

◆第1回交流（6月9日）1歳児・2歳児クラス…砂遊び、3歳児クラス…公園遊び（鬼ごっこ・遊具遊び）、4歳児クラス…公園遊び（けいどろ遊び）、5歳児クラス…歌・いす取りゲーム・塗り絵遊び活動終了後、児童は振り返りをする。

◆第2回（7月5日）、第3回（11月10日）、第4回（12月11日）の交流においても、第1回の交流内容と同様の活動を行い、各グループが毎回異なるクラスと交流するようにし、様々な年齢の園児と関われるようにした。

交流の活動の最後には、小学校生活の楽しさを園児に知らせ、お世話になった園の先生に、感謝の気持ちを伝える。

交流を振り返って

- 園児との交流を通して、児童は協調性や共感性をもつことができた。また、自分の行動が他人に影響を与えることが分かり、責任感を持つことができた。さらに、園児とのコミュニケーションを通じて、言葉遣いを考える機会となり、表現力を向上させることができた。
- 園児を世話することで、他人への思いやりや優しい気持ちが児童の中に育ち、園児の笑顔に触れることで、自己肯定感も高まった。
- 地域では子ども同士で遊ぶことが少なくなっているので、保育園と小学校との連携で一緒に活動することが大切であることを再認識した。
- 天候（雨の場合）によって、活動場所が限られるので、予備日の設定が必要であった。

大人同士の取組　公開保育と事後研修会

7月

ねらい　安心して、友達や教師とつながり、伝え合う姿から、架け橋期の子どもの姿を捉え幼保小のつながりを考える。

ポイント　保育を見て、幼保小で考えた架け橋プログラムの研究主題「ドキドキ・ワクワクが生まれる教育をめざして!! ～安心、つながり、伝えあう　わ　をつくる～」の視点で子どもの姿を語り合う。

実践内容　<準備> 保育指導案には、子ども一人一人の前日の姿と本時の援助を分かりやすく記載しておく。幼保小が話し合いやすいように「ドキドキ・ワクワクシート」を作成し、視点となる安心・つながり・伝え合う子どもたちの姿と、それを支える教師の援助や環境構成について、保育を見ながら記入できるようにした。また、拡大したドキドキ・ワクワクシートを各グループに用意し、各自が書き込んだ付箋を貼りながら協議を進めた。

<公開保育> 5歳児が、遊戯室で継続して遊んでいる帽子取りをした。2チームに分かれ、試合や作戦会議をしたり、保育室で振り返りをしたりしている姿を見る。

<事後研修> 2グループに分かれて研究協議を行った。「安心して遊ぶ姿」「人とつながりをもちながら遊ぶ姿」「人と伝え合いながら遊ぶ姿」「3つの視点の子どもたちの姿における教師の援助や環境構成」について、色別の付箋に記入し、グループで共有した。子どもたちが安心して自分の思いを発信できるような温かい雰囲気が土台となっていることや、教師のタイミングの良い援助のもと、子どもたちが主体性をもって遊びを進めているということなどが共有された。
また、幼児期に悔しい思いや葛藤する気持ちなども十分に味わい、気持ちの調整力をつけることの重要性や、小学校の教員が幼稚園の保育や幼児期の子どもの姿についてより理解を深めることの必要性について話し合った。

<まとめ> 帽子取りをする5歳児の姿から、様々な資質・能力が育まれているということが共通理解できた。また、子どもたちの主体性を支えるような教師の援助も重要であることも改めて認識し、幼保小で共有できた。

成果と課題　幼保小の教員がそれぞれに学び、有意義な研修会であった。今後は、持続可能な組織づくりや取組にしていくことが重要だと考える。

小学校と幼稚園の先生方とじっくりと話し合うことができ、保育園としてつながりをもてる有意義な研修会となった。幼稚園の先生方の取組や、育ちの見守り方を知り、いろいろな発見や気付きがあった。小学校の実態や普段見えない部分も知ることができ、就学に向けたかかわり方を考える際の参考になった。今後も保育園として、子どもたちの理解を深めていく場として参加していきたい。(保育園)

地域の小学校・保育園の先生方と顔見知りになり、教員同士の関係性ができたことは大きな成果である。また、参加者の皆さんに、「夢中になって遊ぶことで、子どもたち一人一人が、それぞれの学びをしている」ということを知っていただけたのではないかと考える。今後は、小学校の授業や保育園での保育も見せていただき、より互いの教育・保育を知り、子どもたちの理解につなげていきたい。(幼稚園)

今回の保育を参観することで、幼稚園での子どもたちの学びの過程を知ることができた。幼稚園でも小学校と同じように、保育の中に「育成を目指す資質・能力」や「ねらい」があることが分かった。学びの過程や環境に違いこそあれ、子どもたちが一所懸命学ぶ姿があることを発見できた。また、幼保小の架け橋プログラムと聞くと1年生だけのものだと思っていたが、幼稚園の先生の指導や助言、声掛けはどの学年でも生かせるものであった。様々な課題をもつ子どもたちへの関わり方は、幼保小の架け橋プログラムに取り組んでいくことで、そのヒントを見つけられる気がする。そのためにも幼保小で研究の共有や、分掌としての幼保小の架け橋プログラム部会の設置といった校内全体で取り組む枠組作りが必要であると感じた。(小学校)

大人同士の取組　保育参観と合同研修会

8月

ねらい

小学校の教職員のほとんどが保育参観をしたことがなかった。そこで、保育参観で就学前施設との交流を進め、保育で大切にしている「子どもの主体性を大事にした指導の在り方」について実際の保育を通して理解したいと考えた。

ポイント

小学校の教職員は、ただ保育参観をするだけではなく、あらかじめ参観の視点に沿って保育者の教育の意図を理解しながら参観できるようにし、後にそれらを意味づけてもらえるよう指導助言の講師を招いて理解を深め、指導に生かせるようにした。交流については小グループでお互いが気軽に話し合えるようにした。

実践内容

<参観の視点>

保育参観に行くにあたって下記の2つの視点を設定し、小学校と保育園の教職員が事後研修会で話し合えるようにした。

- 子どもが何に没頭し、他者とどのように関わり、どんな力を育んでいるか。
- 子どもが主体的に活動できるように担当の保育者がどのように関わり、どのような環境設定がなされているか。

<保育を見る>

保育参観には2交代で小学校教職員全員が参加し、子どもの一日の遊びや生活の流れを考慮し、10～11時頃の5歳児の様子を、上記の視点に沿って参観した。参観中には、子どもたちの日頃の様子や大事にしていることについて園長より話してもらうことで、子ども同士や保育者の関わりの意図、環境による子どもへの影響などについて理解をより深めることができた。

<合同研修会の実施>

事後研には、小学校の教職員以外に保育園の園長と5歳児担当の保育者が参加した。また、学校指導課より3名のコーディネーターが加わっての事後研修会となった。小グループに分かれ、子どもの実態に対する保育の意図や、参観を通しての学びを話し合った。気軽に質問し合いながら話を進め、交流の最後にはそれぞれのグループで出た話を共有した。指導助言では保育や架け橋プログラムについての意味づけがなされ、その場にいた教職員が興味深く聴き、理解を深めていた。研修後の感想には「一人一人の主体性や個性を大事にして力をつけるということを小学校でもつないでいくべき」「就学前施設とのつながりをもっと太くしていきたい」などの意見があった。

<まとめ>

研修で得られた学びや交流で得られた関係を今後につなげられるようにまとめでは促した。研修会が終わってからも、小学校教員が5歳児担当の保育者と子どもたちについて立ち話をしながら今後の交流や子どもの実態について話をしていた。

成果と課題

保育の実践を通して話し合うことで、子どもの実態についての交流だけでなく、目指す子どもの姿なども共有することができた。今後もこのような研修を定期的に行い、保育とどのようにつなげ、子どもの力を発揮させていくかを議論し、取組を進めていきたい。

大人同士の取組　公開保育と合同研修会

10月

ねらい

- 施設を貸す、管理職や1年生担任が入学前後に情報を交換する程度の関わりから、架け橋プログラムの意義を考え、保育参観とその後の合同研修会を実施し、幼保小の教員同士が互いの教育を知り合う関係性を築いていく。

ポイント

- 小学校は、午後の授業をカットし、小学校全教員が幼稚園の保育を見る体制を整えた。幼稚園は、子どもの個別の課題や予想される活動をまとめた幼稚園の指導案などを準備し、保育参観に臨んだ。
- 合同研修会は、架け橋コーディネーターを招いて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と保育での子どもの姿について学び、幼児期の保育について理解を深めたいと考えた。

実践内容

＜準備＞

保育指導案、個別の課題シート、予想される活動シートをみて、保育のポイントを理解するようにした。

＜保育を見る＞

自由に遊んでいるだけに見える。
どういう視点で参観したらよいのか…？

みんなでしている活動に参加しない子どももいる。どうするんだろう？

実際に保育を見ると、保育を見る視点が分からず戸惑った教員もいた。みんなでする活動に参加しない子どももいて、保育者はどうかかわるのだろうかと疑問をもった。保育者はクラスの子どもたちに「皆で一緒に楽しむにはどうしたらいいか」を問掛け、子どもたちは自分で考え、みんなで活動するための方法を共有し、それにより達成感を感じていた。保育者が「入りなさい」と促すことなく、楽しそうな雰囲気や、笑顔で、子どもを自然と活動に誘っていく様子は、小学校の教員には新鮮だった。

＜事後研修の実施＞

前半は、学校指導課架け橋コーディネーターによる架け橋プログラムについての講演を聞き、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と本日の保育の子どもの姿を照らし合わせて学びを深めた。後半は、幼保小の先生がグループに分かれて、小学校教員と保育者との子どもへの関わり方の違いなどを協議した。保育者は、子どもへ指示するのではなく、「どうしたらいい？」と子どもの考えを引き出す言葉が中心であることや、保育者の一人一人の子どもに応じた関わりは、入学後の子どもたちへの関わりに生かすことができることを学んだ。

成果と課題

初めて保育を参観する教員が多く、幼保の保育を知る第一歩となった。また、幼稚園の環境と小学校1年生が入学後に過ごす環境のギャップも感じた。今後、保育参観に関しては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を中心に参観の視点を定めて行いたい。また、子どもたちが安心して主体的に学べる環境や教師の関わりについても学んでいきたい。

始まったばかりの幼保小の架け橋プログラムの取組であるが、今後は、幼保小互いの保育・授業の参観や事前、事後研修、子ども同士の交流など、進めていきたいと考える。

大人同士の取組　小学校教員の保育園懇談会への参加

9月

ねらい

小学校と保育園が足並みをそろえ、家庭の教育力の向上と保護者の教育的関心を高めることは大変意義があることだと考える。そこで、小学校教員が保育園の懇談会に出席し、保護者に直接話をすることで、入学前の保護者の意識や関心を高め、今後の子どもへの関わり方等についても考えてもらう機会にする。

ポイント

初めての取組であるため、小学校が就学前の保護者に対して伝えたい内容を吟味し、新1年生ができるだけスムーズに小学校生活をスタートできるよう保護者の不安等も解消していくことから始めた。

- 保護者に新入学児童の手続きについて知ってもらうことで、スムーズに入学届の提出を行えるようにする（地域の実態から必要なこと）。
- 保護者に小学校の教育課程や本校の教育方針、具体的な取組を知ってもらうことで、小学校生活に少しでも安心感が生まれるようにする。
- 小学校への質問を自由にしてもらうことで、少しでも保護者の不安を解消する。

実践内容

① 主幹教諭と教務主任が保育園を訪れ、入学説明会で話す内容をプレゼンテーションソフトに簡単にまとめ、保護者に向けて講話した。

内容　「本校の教育方針」
「本校が大切にしたいこと」
「各家庭に協力してほしいこと」

② 本校の学力向上の取組、特にGIGA端末を用いた学習（ミライシードなど）について説明。

③ 入学手続き、今後の予定について説明。
⇒プレゼンテーションソフトを用いて、具体的に入学届の書き方も説明し、好評であった。

④ 質疑応答
⇒質問内容としては、GIGA端末についての質問が比較的多かった。

成果と課題

【成果】

- 新入生保護者からは、「入学事務を担当する方の顔を知ったことで少し安心した」「具体的に入学届の書き方や提出方法を知ることができてよかった」という声があった。
- 小学校側としても、自由参観の告知ができたことにより、実際に自由参観に足を運んでいただくことができ、学校の様子を知ってもらう機会になった。また、質疑応答の時間をとることで、たくさんの質問に答えることができ、保護者の不安を取り除くことにつながった。
- 年長の担当の保育者の方にも参加いただいたことで、職員間研修のきっかけとなった。

【課題】

- 講話の内容が、入学説明時に話す内容とも重なるところが多々あり、改良の余地がある。
- 今回の取組は1つの保育園のみだったので、今後他園にも広げていくことを視野に入れて考えたい。

大人同士の取組　新1年保護者・児童対象「○○○小オープンスクール」　1月

ねらい

保育園との協議で「新1年生児童やその保護者は、入学まで学校の様子を知る機会が少なく、不安に思っているのではないか。」という意見が挙がった。その意見を受け、新1年生児童とその保護者が授業の様子を自由に見て回れる機会として「○○○小オープンスクール」を企画し、新1年生児童とその保護者にも公開することで、新1年生児童やその保護者の就学に関わる不安の軽減を図る。

ポイント

- もともと設定されていた参観日にオープンスクールを実施。日程調整や授業準備等の手間を軽減。
- 新1年生保護者への案内は自校の保護者連絡ツールを利用して連絡。印刷や配布の手間を軽減。
- 育成学級を含む全学級を公開としたことで、保護者への児童の成長過程の理解が促進。

実践内容

新1年生保護者のうち約4割（兄・姉が在校生の保護者も含む）がオープンスクールに参加した。その多くが新1年生児童を同伴しての参観であった。参加者の多くが1年生の授業を参観し、児童の学習に取り組む様子や指導者の言葉がけ、教室内の掲示物などから学校の雰囲気を感じている様子であった。一部の保護者については、校舎内を一回りして、特別教室や体育館、運動場といった設備についても見学していた。参加した新1年生児童からは「学校に通うのが楽しみになった」という声が聞かれた。

新1年生保護者に向けて、校舎平面図を掲示し、教室と授業内容を案内するようにした。

【受付の様子】

担任が指導する授業だけでなく、外部講師を招いた授業も公開することで、本校の特色である体験学習についてもイメージがもてるようにした。

【オープンスクールの様子】高学年の命の授業

事後の保護者アンケートでは、以下の通り肯定的な意見が多くみられた。

「学校の雰囲気について、わかりましたか。」

よくわかった50%、わかった50%、あまりわからなかった0%、わからなかった0%

「授業の様子について、わかりましたか。」

よくわかった33%、わかった67%、あまりわからなかった0%、わからなかった0%

「来年度入学されるお子さんの学校生活について、イメージがもてましたか。」

しっかりもてた33%、もてた67%、あまりもてなかった0%、もてなかった0%

「新入学の児童や保護者に対して、オープンスクールの取組は有効であると思いますか。」

とても有効である33%、有効である67%、あまり有効ではない0%、有効ではない0%

成果と課題

事後アンケートの結果から、「○○○小オープンスクール」の取組は、新1年生児童とその保護者に対して学校の様子や雰囲気、授業の様子を伝え、学校生活についてイメージをもたせることについて有効であったといえる。今後は、周知方法を改善したり、実施回数を増やしたりすることで、新1年生保護者の参加率を上げ、より多くの保護者、児童が不安なく学校生活を送れるようにしていく必要がある。

幼保小交流活動　参観シート　令和　　年　　月　　日（　　）　場所：　　小学校

施設：○○○園　○○組　　○名　　小学校：　○年　○組　○名

活動内容　「　　」

ねらい	就学前 ・ ・ ・	小学校 ・ ・ ・
事前協議	○環境構成の工夫 ○支援・留意点	
活動の様子	○注目した活動と幼児・児童の様子	
	○教師・保育者の援助について	
	○環境構成について気付いたこと	
成果		
課題		

※シートのワードデータは京都市教育委員会HP「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」のページからダウンロードできます。

(　　)小学校ブロック　架け橋期のカリキュラム

園・小学校

共通の視点		5歳児・1年生											
①目指す子ども像													
時　　期		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
②発達の具体的な姿とその流れ													
③園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構想等													
④指導上の配慮事項	保育者・教師の関わり												
	環境構成・環境づくり												
⑤子どもの交流													
⑥教職員の交流													
⑦家庭や地域との連携													

※様式例のエクセルデータは京都市教育委員会HP「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」のページからダウンロードできます。

令和6年度までの京都市の研究体制

教育委員会
市立小学校・市立幼稚園

連携

子ども若者はぐくみ局
私立幼稚園・認定こども園・民営保育園・市営保育所

京都市架け橋会議

構成メンバー:有識者　各種団体の代表　保護者　研究ブロックの代表　等

取組内容

・モデル地域3ブロックにおける架け橋期のカリキュラム作成や実践研究についての検討・助言
・架け橋プログラムの普及に関する研修等の検討・助言
・京都市としての方針や支援策などの検討　　等

3研究ブロック

- 御所南小ブロック
- 下京雅小ブロック
- 竹田小ブロック

11実践研究校・・・乾隆小・翔鸞小・朱雀第一小・明徳小・陵ヶ岡小・西野小・嵐山東小・醍醐西小・伏見板橋小・久我の杜小・向島秀蓮小中

京都市の幼保小の教員・保育者への研修と保護者啓発

（子ども若者はぐくみ局や教育委員会、子育て支援総合センターこどもみらい館が協働）

- **架け橋プログラムの理解**
- **幼児教育と小学校教育の相互理解と質的向上**
- **就学前施設保護者への発信**

研究ブロック・実践研究校の取組・成果を京都市全体に発信・普及

・京都市幼保小の架け橋プログラムの手引きの作成・配布
（本市方針や架け橋期のカリキュラム例の提示、連携・接続の具体事例の提示等）
・全市小学校・就学前施設の取組状況の把握と発信
・市立幼稚園・小学校に幼保小連携・接続主任の設置
・全市の小学校と就学前施設の幼保小連携・接続窓口担当者一覧の作成・配布
・参加しやすい研修の在り方の検討、研修動画や架け橋コーディネーターを活用した各校園における研修の充実
・京都市架け橋シンポジウムの開催　　等

令和7年度から
全市小学校区において架け橋プログラムを実施

京都市幼保小の架け橋プログラム３年間（令和4～6年度）の取組概要

京都市では、令和４年度から文部科学省委託事業「幼保小の架け橋プログラム調査研究事業」に採択され、調査研究に取り組んできた。研究ブロック（3ブロック）、実践研究校（11校）を中心に架け橋プログラムの取組を推進するとともに、子ども若者はぐくみ局と教育委員会が連携し、有識者、関係団体の代表者や研究ブロックの代表者などで構成する京都市架け橋会議を立ち上げ、研究ブロック等の取組の成果等も踏まえて、全市的に幼保小の架け橋プログラムを推進するにあたっての具体的な支援策等について、協議・検討を行ってきた。

京都市架け橋会議（令和４年度～6年度）の取組

○年間３回開催（架け橋会議委員はP.101参照）し、下記の内容等について協議・意見交換を行ってきた。
・３研究ブロック、１１実践研究校の調査研究内容の共有と研究の方向性
・３研究ブロックの公開授業の参観と事後協議への参加
・幼保小連携・接続に関する参加しやすい研修の在り方
・全市小学校、ブロック校園、実践研究校の架け橋プログラムに関するアンケート調査からの全市状況の共有
・各団体からの意見集約を踏まえた架け橋プログラムの全市展開に向けた方向性や本市の方針
（連携・接続先の選定（原則小学校区）、推進する取組内容、組織的・持続可能な取組方法についてなど）
・「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」作成

３研究ブロック（令和４年度～6年度）及び11実践研究校（令和５年度～6年度）の取組

・３研究ブロックでの架け橋期のカリキュラム開発 、検証、改善
・幼保小の相互理解の推進（公開授業・保育と協議、子ども同士の交流と事前・事後研修など）
・教育・保育の質の向上、子どもたちの主体性・意欲の向上を意識した取組の実施
・「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」作成協力

自治体の取組

【令和４年度からの取組】
・京都市独自の予算による架け橋コーディネーターの配置⇒ブロックへの指導助言
・３研究ブロックの取組を全市に発信
・幼保小連携・接続に関する教員・保育者への研修の充実
（公立幼小の管理職悉皆研修。市内就学前施設には、こどもみらい館を通じて動画配信）
・研究ブロックの小学校・就学前施設の教員・保育者対象の年度ごとの意識調査

【令和５年度からの取組】
・専任の架け橋コーディネーターの配置
・架け橋通信の配信
・京都市「学校教育の重点」に幼保小の架け橋プログラムを明記
・公立小学校・幼稚園の教育指導計画書に幼保小連携・接続の具体的取組を明記
・京都市架け橋会議に参画する各団体から架け橋プログラムについての意見を集約し、京都市架け橋会議で報告（令和5年度のみ）
・研究ブロック及び実践研究校における幼保小連携・接続主任の役割と成果の研究・明確化
・全公立小学校・幼稚園の管理職対象の幼保小連携・接続に関するアンケート調査等の実施
・保護者向け啓発講座の実施

【令和６年度からの取組】
・幼保小連携・接続主任を全市公立小学校・幼稚園に配置
・幼保小連携・接続窓口担当者一覧の作成、全市の小学校・就学前施設に配布
・就学前施設向け「京都市の小学校教育概要動画」作成・配信（令和６年度のみ）
・「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」作成・配布（令和６年度のみ）
・京都市幼保小架け橋シンポジウム開催（令和６年度のみ）

京都市架け橋会議委員一覧

敬称略

	所　属	氏　名
有識者	京都教育大学教育学部	古賀 松香（令和4～6年度）
	佛教大学教育学部	大林 照明（令和4～5年度）
小学校	京都市小学校長会	國重 初美（令和4～5年度）
		中村　薫（令和6年度）
就学前施設	京都市私立幼稚園協会	小林 正英（令和4～6年度）
	京都市日本保育協会	髙畑 延弘（令和4～6年度）
	京都市保育園連盟	櫛引 雄一（令和4～6年度）
	京都市立幼稚園長会	田中 順子（令和4～6年度）
保護者	京都市小学校ＰＴＡ連絡協議会	山口 修平（令和4年度）
		中本 貴久（令和5～6年度）
	京都市立幼稚園ＰＴＡ連絡協議会	岩井 祥子（令和4年度）
		早﨑 素子（令和5年度）
		壽 恵梨奈（令和6年度）
研究ブロック	御所南小ブロック	鈴木 登美代（令和4～6年度）
	下京雅小ブロック	神内 貴司（令和4～6年度）
	竹田小ブロック	大西 一幸（令和4年度）
		西山 正晃（令和5～6年度）
行政 （学校教育・研修等）	京都市子ども若者はぐくみ局 子育て支援総合センターこどもみらい館	神子田 哲也（令和4年度）
		小司 敦彦（令和5～6年度）
	京都市総合教育センター	中村 友彦（令和4～6年度）
	京都市教育委員会事務局 指導部 学校指導課	近藤　卓（令和4年度）
		中西 昌子（令和4～6年度）
		野口 尚志（令和5～6年度）
		松本 威雄（令和5～6年度）

研究ブロック（小学校・就学前施設）

※以下就学前施設名は、五十音順

	小学校名・就学前施設名
御所南小ブロック	御所南小学校　おいけあした保育園　中京もえぎ幼稚園　ひまわり幼稚園
下京雅小ブロック	下京雅小学校　光林保育園　知真保育園　本願寺中央幼稚園 ゆりかごWECせいせん保育園　楊梅幼稚園
竹田小ブロック	竹田小学校　改進保育所　竹田幼稚園

実践研究校と連携・接続する就学前施設

実践研究校	連携・接続する就学前施設名	実践研究校	連携・接続する就学前施設名
乾隆小学校	乾隆幼稚園	西野小学校	洛東幼稚園
翔鸞小学校	北野保育園　翔鸞幼稚園	嵐山東小学校	嵐山保育園　さくら幼稚園
朱雀第一小学校	光明幼稚園　朱一保育園　六満こども園	醍醐西小学校	大受保育園　中山保育園
明徳小学校	京都きらら幼稚園　セヴァ子ども学園 村松保育園　明徳幼稚園	伏見板橋小学校	板橋保育園　伏見板橋幼稚園　みどり保育園
		向島秀蓮小中学校	白菊こども園　野の百合保育園　向島幼稚園
陵ヶ岡小学校	アヴェ・マリア幼稚園 寺西幼稚園 陵ヶ岡こども園	久我の杜小学校	かもがわ幼稚園

■事務局（教育委員会事務局指導部学校指導課・子ども若者はぐくみ局幼保総合支援室）

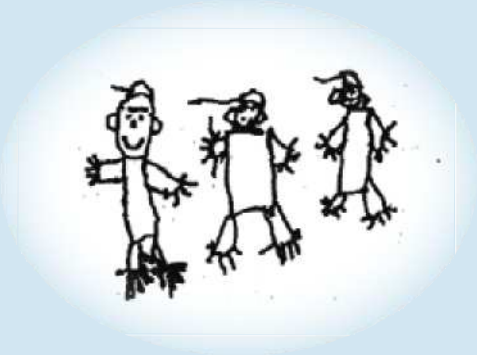
京都市幼保小の架け橋プログラム手引き

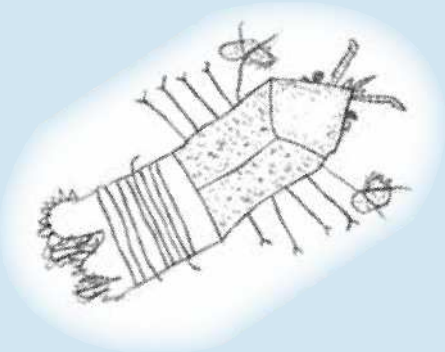
発　行　　令和6年11月

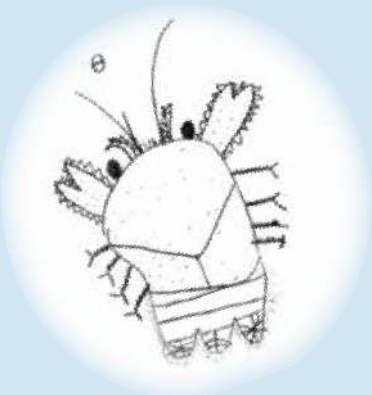
発行者　　京都市教育委員会
京都市子ども若者はぐくみ局
京都市架け橋会議

編集者(※)　京都市教育委員会事務局学校指導課

※編集担当者（主担当者以外は五十音順）：
鳥屋原 学（主）、中西 昌子（主）、
今西 恭子、奥 景子、國重 初美、髙橋 由記子、谷口 浩成、奈良 美保子、
松本 威雄、村田 佐織







开
大
妙
法
大